

鶺鴒沼

久 久 比 奴 末

はまゆうと桜貝と

海光るわが故里

第 1 2 4 号

〈歴史散歩〉 史跡めぐり — 俣野別邸を訪れる	1
岸田劉生1922年頃の二階の窓からの景色	山内 崇嗣… 8
真白き富士の根	岡田 哲明…14
〈チョッと見てみよう〉	
引地川改修紀功碑	有田 裕一…20
松岡静雄記念碑	大川 久…23
「藤沢の巨樹」 鶺鴒沼地区公民館まつりで展示	26
Coffee Break	28
六本松古戦場	有田 裕一…31
明治初期の鶺鴒沼村居住者	34
「相模国準四国八十八ヶ所」情報の一部アップデート …浅場 達也…	53
〈鶺鴒沼を巡る千一話〉	
草土社の若手画家	渡部 瞭……62
活動の記録(令和5年12月～令和6年11月)	70
編集後記	74

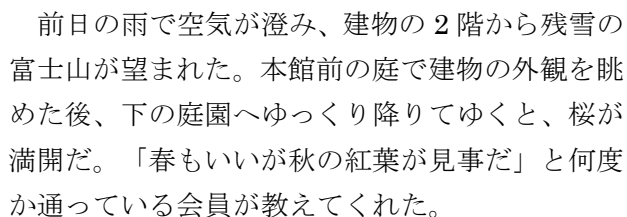
『新編相模国風土記稿』（天保12年、1841）に、「鶺鴒沼村久久比奴末牟良」とあり、当時は“くぐいぬま”と呼んでいたことが分かる

鶺鴒沼を語る会 発行

史跡めぐり

2024年4月9日(火)の4月例会日を春の歴史散歩に充てたが、あいにく雨模様で翌10日(水)に延ばし9名で俣野別邸を訪れた。今年の桜の開花は10日近く遅くお蔭で庭園の桜は満開であった。

バス停から 5 分ほどで俣野別邸の正門。まず館内にあがり 1 階のホールへ。2 階に上がり展示室で係の方から俣野別邸についての説明を受けた。俣野別邸は境川左岸の河岸段丘にあり、ここからは好天に恵まれれば富士山、丹沢の山並みが望める。ゆっくり館内 1 階、2 階を見学し、その後庭園を散策した。





2Fのラウンジで説明を受ける



本館前の庭には巨木が数本



もみじ坂を降りて桜を眺めながらの昼食



本館テラスでお茶して帰路についた



◆ 俣野別邸

俣野別邸は、1939（昭和 14）年に当時の住友家当主であった住友友成（16 代住友吉左衛門）が発注した住宅で、住友家の東京本宅の別邸として現在の横浜



市戸塚区東俣野町の丘陵地に建築された。設計者は佐藤秀三であった。

基本的には当時の大財閥一家が生活するために、使用人の居住区も備えた大規模な西洋風建築であるが、設計に際し北欧の伝統的な建築様式である柱や梁を露出させる様式を基本としながらも、屋根に日本瓦をのせるなどの伝統的な和風様式も取り入れている。建物は Y 字形で、昭和初期に流行したモダニズムの影響を受けており、和洋と現代建築が融合し折衷した建築物であった。

16 代住友吉左衛門の妻・春子（公爵西園寺八郎次女）が 1998（平成 10）年 12 月に死去するまで生活していたが、2000（平成 12）年に住友家が相続税として国に物納し、政府に所有権が移った。2004（平成 16）年 7 月に国の重要文化財に指定され、保存と一般公開に向けて 2008（平成 20）年 1 月から修復工事が進められていたが、2009（平成 21）年 3 月 15 日に放火とみられる火災で焼失した。これに伴い、2011（平成 23）年に重要文化財指定は解除された。

2016（平成 28）年に横浜市が公園施設として再建。新築当時の設計図面を基に、建具と照明器具、屋根瓦の一部、一部の建物（事務棟脇の書庫、子供室棟の浴室）など焼失を免れた部分や部材を活用し、可能な限りオリジナルに近い姿を再現した。2017（平成 29）年 2 月 10 日には横浜市認定歴史的建造物となった。2017（平成 29）年 4 月からは俣野別邸庭園の一部として公開されている。なお、庭園オープン後は旧所有者を示す「住友家」を冠した名称や、住友家旧所有との情報を加えた解説の類は、横浜市や、現在の指定管理者の公益財団法人横浜市緑の協会のサイト・パンフレットなどでは全く使われていない。

（Wikipedia より）

◆ 住友財閥令嬢誘拐事件

俣野別邸訪問のことを例会で説明していたら、岡田哲明会員より住友財閥令嬢誘拐事件の話が出た。佐藤和子会員はこの誘拐事件のことを周りから聞かされ怖い思いをしたと話した。

この事件は終戦の翌年 1946(昭和 21)年 9 月 17 日午前 10 時半ごろ、片瀬町で起きた。横浜市戸塚区東俣野町の住友吉左衛門の長女が、片瀬町の白百合高女付属小学校から帰宅途中、何者かに連れ去られた。翌 18 日午後になっても帰宅せず神奈川県警、住友全機関をあげての捜査がされ大騒ぎになった。長女は 6 年生で自宅から藤沢駅までは自転車、そこから小田急江ノ島線で学校に通っていた。

校門を出て片瀬江ノ島駅に向かっていた時に、連れ去られた。詳細は省くとして、全国指名手配がされ 21 日には目撃者の通報があり 23 日朝、岐阜県で保護され、25 日には東俣野の住友別邸に戻った。犯人は、それ以前にも少女誘拐を繰り返していた常習犯で、逃亡中に住友家に対し 1,000 万円の身代金を要求することを考えていたとのことであった。無事、令嬢誘拐事件は解決したが、その年の 9 月、GHQ の指令により住友を含めた 4 大財閥が解体された。

この記事の中に藤沢駅前の自転車預り所に置かれていた長女が通学に使っていた自転車の写真が掲載されている。自宅から藤沢駅までは坂道を降りて行くが

駅から自宅に戻るには遊行寺の坂を登ることになる。当時としてはモダンな自転車だが変速ギアはなさそう。どのようにして登ったのか、住友財閥の令嬢なら車での送り迎えもできたのに、と皆が不思議に思う一面を残した事件だった。



藤沢駅前の自転車預り所に置かれた通学に使っていた自転車

出典：朝日新聞東京社会部 OB 会編「戦中・戦後五十年」

俣野別邸を訪れて

◇ 今回の見学会には気をもんだ。天気が悪く当初予定した例会の日が雨で翌日に延期になった。その影響で参加者が減った。しかし、好天に恵まれたことと例年より桜の開花が遅れたことで絶好の花見になった。

俣野別邸は放火にあい再建されたものであるが当時の住友財閥の威容を今に伝えている。

運よく晴れて富士山が見えた。敷地は巨木が多く、新緑も見られ清しい気持ちにさせてくれた。邸内は意匠を凝らしており、建築としても見ごたえがあるものだった。ただドアの入り口の高さが今に比べると低く、当時の人は小柄だったことが想像される。

今回はなるべく歩く距離を短くしようと考えたが、庭園が広く高齢の方には少しきつかったかもしれない。次回への反省点である。

それでも満開の桜の下、芝生に寝そべったり、ベンチに腰掛けたりしてのんびり過ごせたことはよかった。俣野別邸は藤沢市と横浜市の境にある境川の河岸段丘の縁に位置している。五島美術館など昔の財閥の建物は河岸段丘の上にあったことは面白い。（大川 久）

◇ 悪天候のため翌日に延び、朝を迎えた。なんと素晴らしい日！バスを降り、ちょっと横丁に入るといふ感じですぐに着いた。あっ、富士山！ 建物に入る前から素晴らしいロケーションに騒然。大財閥のイメージから贅を尽くした外見かなと思いきや、大きいけれど落ち着いた色合い、そして simple。お庭は、背高のつぽの木々を取り囲んでいる。さぞかし夏は涼風が頬を撫で心地いいのではないかなあと。我が家だったら私の憧れハンモックを吊るしスヤスヤとなんて想像を交えながら屋内に入る。

おっとこれは、素敵。あらゆるところに光が入るように設計されている。お洒落な和室にあわせた扉の材質。そしてあらゆるホール、部屋、廊下などに小粋なお花。心憎いばかりである。

二階の一番端は楕円形の部屋でガラス張り、ここからもシンメトリカルな雪を抱いた富士山が見える。何か住む人の心が伝わって来るような住友邸だった。羨ましい限り…。

バス停の通りは桜並木である。たくさんの花びらが私を楽しませてくれた。桜の季節は終わろうとしている。（刀根 恵子）

◇ 桜満開、快晴、春爛漫の4月10日水曜日、近郊の俣野庭園を皆さんと一緒に訪ねました。当初予定の9日の嵐はウソのようで順延された10日は暖かく快晴。

先ず別邸の見学から。この別邸は昭和14年に財閥住友家の家族の住まいとして和洋折衷の住宅として建築されたものを平成21年に放火により消失、その後に再建され、意匠的にも優れた住宅建築であり、歴史的にも価値の高い建築物として平成29年に横浜市の歴史的建造物に認定されています。

住友財閥の別邸にしては他の財閥の別邸にくらべて、大ホール大宴会場もなく、全体的に質素である。しかし、富士山に見える展望室をそなえている。

芸術的な価値のある調度品は火災のまえに取り外されており焼失を免れ、それを使用しているとのこと。趣のある欄間や照明器具が見られた。

邸内を見学の後、緩やかな散策路、モミジ坂を経て芝生広場へ。そこで満開の桜をみながお弁当を広げる。他に3組ほど来園者がおられたが、静かな環境で存分にお花見ができた。不思議なことにすぐそばを自動車道藤沢バイパスが通っているにもかかわらず車の音が聞こえない。庭園を取り囲む樹木林のせいであろう。別世界である。

庭園は、横浜市緑の協会によって、よく整備されており四季折々の花が植えられてあり、桜の後は、ツツジ、バラなどを楽しめるように作られている、晩秋の紅葉も楽しめます。いつ行っても楽しめる庭園で、これからもぜひ行きたい場所のひとつです。（西村 望）

◇ 思い出さずにはいられない。十数年むかしの俣野別邸本館全焼事件である。その少し前に近所の旧モーガン邸が焼失したばかりであっただけに、ショックは大きかった。無人の別荘が狙われたのだ。

今日のような平穏なフル活用に到る道を拓いた方々に感謝しつつ、陽光眩しい芝生の庭でコーヒーを頂いた。（十代田 知三）

◇ 春の見学会、今年は雨のため一日延ばした4月10日(水)に戸塚の俣野別邸を訪ねた。遊行寺坂を登るとすぐ近く。高台に広がった庭園と、和洋折衷の家屋は暖かく、素晴らしい。以前も庭園を訪れたことはあるが邸内は初めて。瓦葺きの屋根と暖かな洋風の建物の内部は更に心をひかれた。

俣野別邸と聞いた時、アッ！と思い出したことがあった。終戦の翌年だったか、住友家の令嬢が通学途中に誘拐されたという事件が起こった。小学生の頃で、すっかり忘れていたが、今思ったことは当時この台地から自転車で坂を下

り(ことによったら北側から下りて境川沿いに行ったのかも) 藤沢市内を通り抜け藤沢駅へ、そして電車で学校(白百合学園)のある片瀬までの通学。帰りはあの台地を自転車で登るのは、どんなにか大変だったことか。戦後あまり経っていなかった頃のことで、今では遠い遠い日になってしまった。(佐藤 和子)

◇ 俣野別邸を訪れるのは何回目だろう。河岸段丘に造られた庭園と建物本館。本館は、「昭和初期のモダニズム影響下における、ハーフティンバー・スタイルを取り入れた和洋折衷住宅建築」として評価されている。

以前、ここでの音楽会に二度ほど招かれた。20名ほどの集まりだが、この雰囲気ピッタリで演奏されるクラシックに心が和んだ。

今回訪れた4月10日は雨上がりの好天気、満開の花びらが散ることもなく最高の花見になった。桜の開花が遅れた今年の天気に感謝!

この庭園には巨樹が多い。目立つのはヒマラヤスギやケヤキ。

下の段の芝生広場のはずれに休息棟がある。そこに大型のドイツ型標本箱が置かれているのにはビックリし興味をそそられた。各種の蝶が納められているが、ここ俣野別邸で採れた個体も含まれていた。ギフチョウ、キベリタテハなど他の産地のものが入っているがひとつ気になった標本があった。当庭園で採れた印が付けられたウスバシロチョウである。相模川以西では採集される蝶だが相模川の東側では生息していないと言われている。この標本を寄贈した方に蝶探索をしている一人として、採集時のことを聞きたいと思った。

(竹内 広弥)



休息棟に展示された蝶のドイツ型標本箱

岸田劉生 1922 年頃の二階の窓からの景色

山内 崇嗣（国立市在住 美術家）

当時、劉生は鶴沼にあった別荘を自宅とし 1922 年頃、洋館風建物の二階の窓から「窓外夏景」〔絵 1〕「窓外早春」〔絵 2〕「晩夏午后」など近しい場面で複数枚絵を描いています。2022 年に公開された森村・松方コレクションの風景画「二階窓外之景（秋景）」〔絵 3〕も近しい風景画です。この記事では、関連の絵や古地図から、劉生が窓から眺めたであろう 1922 年頃の鶴沼の景色を著者が妄想的に再現していきます。

「窓外早春」〔絵 1〕をみると写実とは言い難い描写で、二本の電柱が目立ち、片瀬山がみえるのは直ぐわかります。有機的な林がモコモコモヤモヤと茂り、建物の接地面がわかりづらいです。古民家がある路面には垣根があり、住宅は数件あったようです。わかりにくいこと、わからないことは、複数の資料から調べてみます。

「窓外早春」〔絵 1〕1922/04/01 の繪日記〔絵 7〕によると、劉生の家の裏、北東の敷地には空地が広がっています。1922/04/08 の繪日記〔絵 8〕に出てくる古民家の手前に垣根が広がっています。該当の景色とは断定ができないけれど、特徴は似ています。

岡田哲明氏が作成した「岸田劉生 松本別荘 北東側面図」〔絵 10〕から劉生の家の窓の高さが想像でき、そこから窓から見える雑木林や家屋の大体の高さが想像できました。そのあたりの雑木は平屋程度の高さで、電柱はその 2 倍、3 倍の高さです。

現地を歩くと劉生の自宅から北東方面にのびる道は、緩やかに傾斜し向こう側は小高い丘になっていました。その道は、のちに湘南学園通りと呼ばれます。古地図を集めて同じ地域を比べてみました。

地図の地域は、劉生の自宅跡地から、歩いて観察した丘を仮に「丘」として記入しました。「丘」の場所は、藤沢市鶴沼桜が岡 2 丁目あたりです。1931 年の地図から 1960 年代の地図を揃えました。地図上で目立つ場所は、1933 年に開

校した湘南学園小学校です。勿論、劉生が鵠沼に居た時代は小学校はなく雑木林だったのでしょう。小学校のグラウンドの南側、劉生の自宅から北東の区画には劉生の絵から想像できないくらい建物があり、1931年の地図・大藤澤復興図では轟邸と指定されています。

今自分の手元にある資料や劉生の絵の要素から 1922 年頃の再現景色〔絵 9〕を作成し、構造物に名前をつけて、更に地図へ復元しました〔地図 9〕。

それぞれの資料の誤差は認めつつ、絵で見かける構造物、複数の資料で見かける構造物を優先して、視線と地形を考慮して総合的に考えました。

まず、位置決めで手掛かりにしたのは、電柱の位置です。電柱というものは、一度建つと代替わりしても同じ場所や近い場所に建ちやすいです。今ある電柱の場所を参考にしました。劉生絵日記 1922/03/29〔絵 7〕によれば通りの左側にしか電柱はありません。

1922 年頃の再現景色〔絵 9〕で、視線から重なる構造物

- ・劉生の自宅から、一番大きな電柱（電柱 a）と古民家（家 a）
- ・劉生の自宅から、二本目の電柱（電柱 b）と丘の上の家屋（家 g）
- ・劉生の自宅から、瓦屋根の民家（家 c）と片瀬山の山頂

この場所を其々直線で繋ぎつつ、古地図で住居が在る所、前後関係、町が出来る自然な仕組み、誤差、そのようなことを考えました。

この地図（地図 9）は、正確な 1922 年頃の地図ではありません。今、残っている資料から自分が考えて作った 1922 年の鵠沼の景色です。窓の視界から見られない場所は、余り記述しないようにしました。地図作成はかなり悩み、地図を見る度に修正しています。

「窓外夏景」「窓外早春」の絵から復元地図〔地図 9〕を作成していて、劉生の別の絵の景色についても考えました。「霽(は)れたる冬之日」〔絵 4〕「五月の砂道」〔絵 11〕「晩春の草道」〔絵 12〕「道に生えたる枯草」〔絵 13〕などに出てくる、木造電柱や、白い柵のある茅葺きの古民家がある通りは、後の湘南学園通り「窓外夏景」「窓外早春」の絵に出てくる通りと同じ通りだろうか？と考えました。自分では、その点で検証してみて、多分、「窓外夏景」で

見かける古民家（家 a または家 e）が、「道に生えたる枯草」の古民家と同じ住居なのか？考えると、垣根がないこと、電柱の色や材質が違うようなこと、道路と電柱の位置、この点で幾ら位置を微調整しても辻褄が合わない、其々の風景テーマの絵には、3 年位の時差があり、その時差で景色が発展や更新されたかも？と考えたのですが、それは難しいようにも感じました。ただ「霽(は)れたる冬之日」には片瀬山を見かけるので「窓外夏景」の通りと「霽(は)れたる冬之日」「五月の砂道」「晩春の草道」「道に生えたる枯草」に見かける通りは、並行する別の通りと考えます。

今回の推測では読者の方が異論反論あるかもしれません。自分は正誤性を見つけるより、絵をよく見ることが面白く大事なことだと考えます。絵をよく見る経験を促すためにこのような見方を提示しています。

（やまうち たかし）

参考文献

岸田劉生全集 岩波書店（1979～1980）

没後 90 年記念 岸田劉生展 カタログ図録（2020）

京都国立近代美術館のコレクションでたどる 岸田劉生のあゆみ（とんぼの本）梶岡 秀一

岸田夏子 新潮社（2022）

鶴沼 第 85 号 岸田劉生の鶴沼風景「藤沢の山」か「片瀬の山」か 伊藤聖

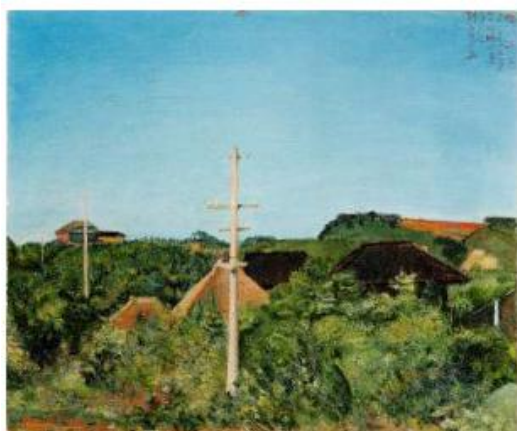
鶴沼 第 86 号 再考「岸田劉生の住んだ別荘」一家具レイアウトを含む復元作業の記録—

岡田哲明

鶴沼 第 102 号 かわせみ学園放送講座講義録 岸田劉生と鶴沼(1) 岡田哲明

鶴沼 第 103 号 かわせみ学園放送講座講義録 岸田劉生と鶴沼(2) 岡田哲明

鶴沼 第 104 号 劉生研究 劉生「鶴沼風景」の舞台検証 渡部瞭



〔絵 1〕 劉生 窓外夏景 1921



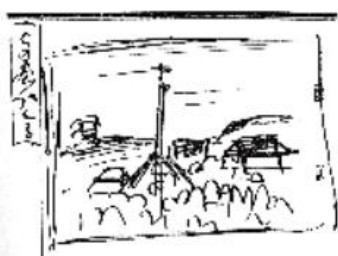
〔絵 2〕 劉生 窓外早春 1922



〔絵 3〕 劉生 二階窓外之景（秋景） 1921
旧 森村義行コレクション



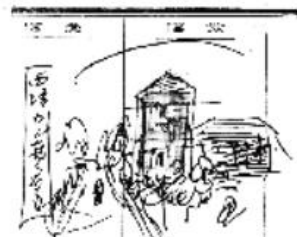
〔絵 4〕 劉生 霽（は）れたる冬之日 1917



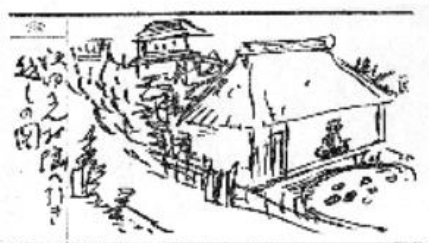
〔絵 5〕 劉生繪日記 1921/07/20 窓外の風景



〔絵 6〕 劉生繪日記 1922/03/29 窓外の風景



〔絵 7〕 劉生繪日記 1922/04/01 南西方向に自宅を眺める



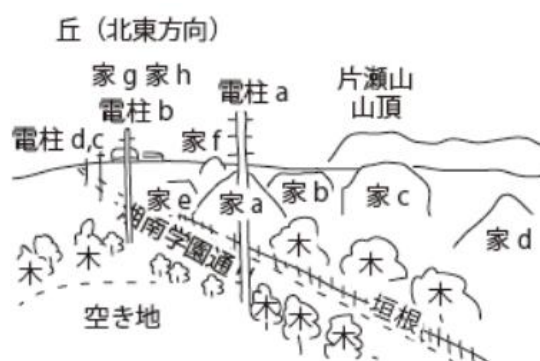
〔絵 8〕 劉生繪日記 1923/04/08
路面に垣根がある茅葺屋根の家



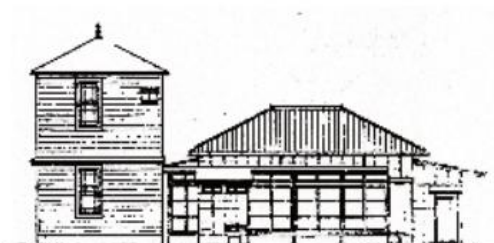
〔画像 1〕 現在の近い視界の景色 google earth



〔地図9〕〔絵9〕の再現景色からの1922年頃の復元地図



〔絵9〕劉生の絵の要素から1922年頃の再現景色



〔絵10〕岸田劉生 松本別荘 北東側面図
(作成：岡田哲明)



〔絵11〕
劉生 五月の砂道
1918



〔絵12〕
劉生 晩春の草道
1918



〔絵13〕
劉生 道に生えたる枯草
1917



【地図1】スーパー地形



【地図5】1951 藤沢市全圖



【地図2】1931 大藤澤復興市街圖
(地図加工済)



【地図6】1953 藤沢地形図 片瀬・鵜沼
(地図合成済)



【地図3】1945 全国主要都市戦災概況図
附図第五 藤澤市



【地図7】1954 藤沢地形図 鵜沼



【地図4】1945—1950 国土地理院 空撮



【地図8】1961—1969 国土地理院 空撮

真白き富士の根

七里ヶ浜の哀歌について

岡田 哲明（会員）

はじめに

2025 年は明治 43 年 1 月に七里ヶ浜沖で起きた海難事故：逗子開成中学生ボート遭難 115 周年にあたる。事故の慰霊祭に歌われた追悼歌は、その後、「七里ヶ浜哀歌」または「真白き富士の根（嶺）」と題して一世を風靡した。

事件と今日までの推移の中に、鵜沼を語る会編『鵜沼の文化人』に記載されているに宮内寒弥と菅沼五郎に以下の様な関わりがある。

宮内寒弥（作家 1912~1983 本名：池上子郎）は 1942~1965 年、鵜沼松が岡に住んだ後、鎌倉腰越、大磯に転居した。宮内は、この事件を扱った小説「七里ヶ浜一或る運命」を雑誌『新潮』1977 年 9 月号に発表した。これには「逗子開成中学ボート遭難事件の責任を負った父、数奇な宿縁に連なる海の鎮魂譜」という惹句が付されていて、翌年、単行本が出版された。

1978 年 1 月 23 日（事故と同月同日）、江ノ電沿線新聞社を訪れた宮内は「今回、新潮社から『七里ヶ浜』という本を出版したから紙上で紹介して欲しい」と依頼したという。この小説で宮内は同年第 6 回平林たい子賞を受賞した。

菅沼五郎（彫刻家 1905~1999）は 1964 年に鎌倉海浜公園稲村ヶ崎の地区が出来た時、「ボート遭難の碑」が建立された。その彫像の作者であり鵜沼松が岡に住んだ。

事件の概要

1910（明治 43）年 1 月 23 日の日曜日、当時全寮制だった逗子開成中学の寮生 12 人は舎監の不在をいいことに、寮を抜け出し、無断で学校所有のカッターボート（短艇）「箱根号」を引き出し、江ノ島へ島を打ちに繰り出したのである。しかも 5 年



稲村ヶ崎からの七里ヶ浜・江ノ島・富士山

の1人は小学5年生10歳の弟(下の内訳には含まず)を同船させたのであった。
遭難した逗子開成中学生の学年と年齢の内訳は以下のようである。

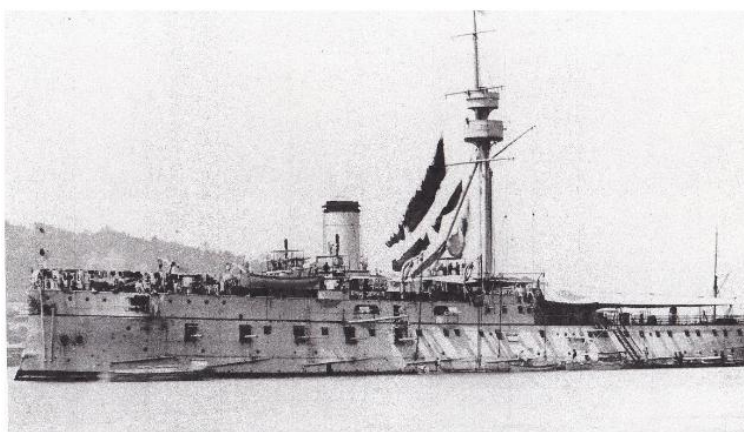
5年生6人：21歳、20歳、19歳2人、18歳、16歳

4年生2人：19歳、17歳

3年生3人：15歳、14歳2人

この年齢構成を見て驚かれると思うが、今日のように同学年は殆どが同じ年というのではなく、当時は、同学年でもかなり年齢差があった。とくに逗子開成中学は創立したばかりで、その傾向が強かったであろう。

このカッターボートは1908年4月台湾澎湖県馬公の港に寄港中に火薬庫爆発事故を起こして瞬時に沈没した巡洋艦「松島」に搭載されていたもので、台湾から移送され学校が無償で払下げを受けたものであった。校則では艇の使用は舎監の許可印と生徒監の許可印が二重に必要であり、さらに生徒のみによる漕艇は逗子湾内に限り、湾外に出ることは禁じられていた。彼らは艇庫番の小母さんを脅してボートを出し逗子湾から湾外に出て江ノ島を目指したのである。



巡洋艦「松島」(艦装された短艇は艇長7m オール12本と推定される)

ボートは江ノ島に着き、さて帰るところには風が強まり、地元の漁師が制止したが聞きいれず帰途についた。

昼頃、小坪の漁船が稲村ヶ崎の沖合を通りかかり、オールにしがみついて漂流している男を発見。助け上げて小坪の浜へ急行し遭難船があることを知らせ、一方では火を焚いて体を温めたが蘇生しなかったという。5年生木下三郎であった。

翌24日は早朝から漁船30余隻が搜索に当たり、午後からは横須賀から駆逐艦「吹雪」「霞」も加わったが手掛かりはなかった。

25日には水雷艇「鷗」「鴻」も搜索に加わり水中眼鏡で搜索していた一隻の漁船が行合川沖合の海底で遺体を発見、鉤網で引き揚げたところ5年生徳田勝治と弟の小学5年武三の二人であることが分かった。兄は弟をしっかり抱きしめて

いた（一説では紐で体を結んでいたという）姿が涙を誘ったという。

26日は朝から吹雪で1遺体も発見できなかった。

27日は無風の快晴で残りの遺体がすべて収容され、箱根号も見つかった。

なお、江ノ島へ着いたとき3年生の一人内田政雄は体調をくずし下船して江ノ電で極楽寺の実家へ帰ったため難を免れていたことが分かった。

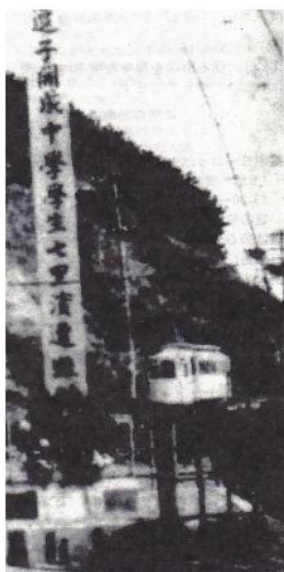
月が替わって2月5日、市内の寺院に芝増上寺より導師を招いて遺族による法要が営れ、翌2月6日には開成中学校において学校主催の追悼式が営まれ4,000人余の参列者があった。

席上、姉妹校である鎌倉女学校生徒70名が同校数学教師三角錫子のオルガン伴奏で歌われたのが、後に「七里ヶ浜の哀歌」として広く知られるようになる。

三角錫子（1872~1921）は北海道札幌師範学校を出て教職にあったが結核療養のため湘南に来て鎌倉女学校の数学教師をしていた。1911年鎌倉女学校を辞し上京、1916年に東京でトキワ松女学校を開設した。三角の経歴については、トキワ松学園のホームページに詳しく紹介されている。

事件その後

逗子開成中学は1903年に東京開成中学の分校として設立、1909年に東京開成中学から独立、その翌年にこの事件は起こった。事件の首謀者は公立中学を素行不良で退学になった転校生で、いわば不良学生が起こした校規校則無視の暴挙であって、学校側に何らの過失も瑕疵もなかったのである。



木柱の七里浜遭難慰霊

ところが、徳田兄弟の二遺体の状態が報道されると、それが兄弟愛の発露と世間に受け止められ、歌詞の「帰らぬ十二の 雄々しきみたまに」が遭難者を英雄視するような風潮となり学校側の管理責任が問われるようになった。

教師で寮の舎監でもあった石塚巳三郎（宮内寒弥の父）に非難が集中するようになり彼は退職を余儀なくされ、頭陀袋ひとつで四国八十八カ所巡礼の旅に出たという。その後、岡山の農学校に教職を得、縁あって池上家に婿入りし汚点の付いた石塚姓を捨てたのである。1912年に長男が生まれ子郎と命名した。

子郎は成長して作家となりペンネームを宮内寒弥と称した。小説『七里ヶ浜』を書いたその人である。

1931 年、江ノ電開通 30 周年に行合川鉄橋の近くに、「逗子開成中学学生七里浜遭難慰霊碑」と書かれた木柱が建てられ、1964 年、逗子開成学園創立 60 周年（ボート遭難事故 55 周年）記念事業として同校校友会、鎌倉開成会によって、稲村ヶ崎の鎌倉海浜公園内に菅沼五郎作「ボート遭難の碑」ブロンズ像が建立されるまで存在したが、木柱はこれを機に撤去焼却されたようだ。



ボート遭難の碑

真白き富士の根：原曲について

原曲は 1805 年に刊行された白人霊歌集のなかの「Love Divine」で作曲者はジェレマイア・インガルス（Jeremiah Ingalls 1764~1838）である。日本福音連盟「聖歌集」に第 623 番として収録されている。堀内敬三がゴードン作曲と紹介したので、そう思っている人が多いが、チューンネーム Garden を作曲者名と堀内が勘違いしたものである。

このメロディに「故郷の空」の作詞者として知られる大和田建樹が「夢の外」と題して「昔の我が宿 変わらぬふるさと 夢の外に 今日ぞ逢える 嬉しさ余りて 寝られぬ枕に…」という歌詞を付け、明治 23（1890）年「明治唱歌」として出版され、女学生の間で盛んに歌われたという。《七里ヶ浜の哀歌》はこのメロディを借りて歌詞を作ったのである。5) 番の「悲しさ余りて 寝られぬ枕に」は、明らかに「夢の外」が下敷きになっているとっていいであろう。

真白き富士の根：歌詞と作詞者（三角錫子か 福田正夫か）

七里ヶ浜の哀歌

三角錫子 作詞
ガーンドン 作曲

♩ = 60

ましろきふしのねーみどりのえのしまあ
おきみーるも、ーいまはなーみだーか
えらぬじゅうーにのおおしきーみたーまにさ
きげまーつるーむねとこーころー

- 1) 真白き富士の根 みどりの江の島 仰ぎ見るも 今は涙
帰らぬ十二の 雄々しきみたまに 捧げまつる 胸と心
- 2) ボートは沈みぬ ちひろの海原 風も波も 小さき腕に
力も尽き果て 呼ぶ名は父母 恨みは深し 七里が浜辺
- 3) み雪はむせびぬ 風さえ騒ぎて 月も星も 影をひそめ
みたまよいずこに 迷いておわすか 帰れ早く 母の胸に
- 4) み空にかがやく 朝日のみ光 闇にしずむ 親の心
こがねも宝も なにしに集めん 神よ早く 我も召せよ
- 5) 雲間に昇りし きのうの月かげ 今は見えぬ 人の姿
悲しさ余りて 寝られぬ枕に ひびく波の 音も高し
- 6) 帰らぬ波路に 友呼ぶ千鳥に 我も恋し 失せし人よ
尽きせぬ恨みに 泣くねは共々 今日も明日も かくて永遠に

この歌が鎌倉女学校数学教師三角錫子のオルガン伴奏で同校女生徒によって慰霊祭に歌われたのは先に述べたとおりだが、やがて楽譜も多数出版されて一世を風靡するほどに流行した。それらは作詞：三角錫子というものが大多数だが、少女倶楽部の付録では福田正夫になっているという。

現在、作詞者は神奈川師範学校生だった福田正夫によるものという見方が研究者の間では有力である。

福田正夫（1893~1952）は鎌倉雪ノ下にあった神奈川県師範学校の学生で文学仲間と文芸雑誌を作っていた。この歌詞をそれに載せるため清書して机の上に置いて置いていたもので、何者かに持ち去られた。それが誰か。推測では同師範学校音楽教師の小林錠之助で、追悼式が数日後に迫って三角が苦慮しているのを見かねて提供したというもので、彼は「いいものがあった」と持ち去ったらしいのだという。歌詞は1~3番を福田が作詞し、4~6番は仲間と合作したもので、二三の語句を変えただけで歌われた。

後日、サトウハチローは、「この歌詞を読めば福田の詩であることはすぐに分かるよ」といったそう。三角錫子作詞とした楽譜が流布しても福田や娘たちが異を唱えなかったのは、福田の四女美鈴によれば「今から騒いだら三角さんがかわいそうだから」という母（福田の妻）の進言を受け入れたからだ。母はクリスチャンで、人を傷つけることがないよう常に心掛ける人柄であったという。

楽譜発行・レコード発売・映画化

1915 年：「七里ヶ浜の哀歌」レコード発売

「音楽界」に歌詞掲載

1916 年：「音楽界」に歌詞と楽譜掲載

「哀歌」と題して音楽社が楽譜を出版

1935 年：松竹が映画化

1954 年：大映が映画化

蛇足

藤沢市民病院の総合受付電話の接続待ちチャイムのメロディは「真白き富士の根」である。なお、富士の「根」は「嶺」と書かれたものもあるが元の詩は「根」である。七里ヶ浜沖から江ノ島を見れば、まさに江ノ島は富士の根元に位置するではないか。
(おかだ てつあき)

参考文献、資料など

「鶴沼ゆかりの文化人」鶴沼を語る会編 2009 年刊

「江ノ電沿線新聞」 2019 年 2 月 1 日付 吉田克彦記

「七里ヶ浜」宮内寒弥著 新潮社 1978 年刊

「藤沢の文学」北沢瑞史著 藤沢文庫 6 名著出版 1980 年刊

「日本唱歌集」堀内恵三・井上武士編 岩波文庫 1958 年刊

「鶴沼」88 号 鶴沼を語る会 2004 年刊

「水曜会誌 24 巻 3 号」京都大学工学部 OB 会誌 小岩昌宏著 PBF

「真白き富士の根」Wikipedia

「松島（防御巡視艦）」Wikipedia

「トキワ松学園」HP

「えのぼ」HP 写真：七里ヶ浜・江ノ島・富士山/ボート遭難の碑

引地川改修紀功碑

有田 裕一(会員)

私どもが利用している鵠沼公民館の前を海の方へ行き、引地川へつき当る。ここに小さな道祖神碑と共に建つ紀功碑がある。今は周りの樹木が茂りその中にひっそりと建っている。碑文は大分かすれていて読みにくくなっている。原文は漢字、片仮名交じりであるが、鵠沼を語る会の元会長伊藤節堂氏の現代文に直したものがあり、理解しやすいのでこれを記すことにする。



建立 昭和 9 年 2 月
鵠沼海岸 2-17 引地川畔
高さ 185cm 幅 105cm 自然石製

「引地川は水路迂余曲折して流水の疏流良好ならず、一朝豪雨に会えば堤防決壊して濁水氾濫し、年々農作物を害す、又しばしば鵠沼別荘地を浸して住民を苦しむ、この引地川の改修は藤沢町多年の宿題なりしも、町財政はこれの工費の負担に堪えずやむを得ず年々数千円を投じて応急修繕を反覆し一時の苟安を図れり偶々時局匡救事業の実施せらるに当り、町理事者は極力県当局に対し引地川の改修を懇請し幸に県当局の納まる所となり、昭和 7 年度於て金参萬貳仟円、翌 8 年度に於て金参萬六仟円を配当せ

られ、昭和 9 年 2 月引地川下流、延長約壱千間の改修を完了せり。是に於てか、多年の水害は除去せられ、且つ下流一帯の風致を美化し別荘住宅地としての真価を増大せり、由来本工事は新川敷の取得に工事の実施に多大の困難を伴いしも遂に所期の目的を貫徹し最良の成果を収め得たる所以のものは県当局の適切なる指導と、町技師の真摯な努力に頼るといえども亦以て鵠沼耕地整理組合員の理解と工事請負人の誠意とに由るにあらずんば何ぞ能く此の如くならむや、ここに碑を建て其の功績を記し長へに後昆に伝う」

昭和九年二月吉辰

藤沢町長 従四位勲三等功五級 一木与十郎撰

県立湘南中学校教授嘱託 佐野梅吉 書

改修前の引地川は図1の様にぐねぐねして流路も安定せず砂浜を片瀬川方面へ向かう性格があったようだ。改修後の状態は、図2から分かるように屈曲していた流れが直線的になった。



図1
昭和4(1929)年



図2
昭和14(1939)年

右の写真は改修前の引地川河口辺り。左手に烏帽子岩、右奥に赤土山が見える。赤土山は片瀬山の砲台からの射撃演習の標的であり、湘洋中学の校庭に残っていた。



①

昭和9(1934)年頃の引地川改修工事竣

改修前の引地川河口(大正、昭和初期?)

功記念の絵ハガキ② ③をみると近代的河川になったのが分かる。

昭和14年の改修工事で流れが直線的になったため、日の出橋から西側へしばらく行った木又地藏の辻(元の流路)まで、鵠沼の地番がそのまま残った。

この改修碑は平成2(1990)年の台風の増水で左岸堤防が決壊し、鵠沼橋も落橋した。この時、紀功碑も川底に沈み、長年そのまま横たえていたが当時の鵠沼を語る会会長の塩沢努氏の尽力でクレーンで引き上げられた。

一木氏と一木通り もう一つの碑

大正、昭和と鵠沼海岸の人口は増加、現松が岡は畠地面積が多かったが高瀬通り、山口通り等、宅地開発と住宅地の造成に拍車がかかってきた。当時、郵便配達をしていた渋谷良之さんが鵠沼を語る会の会合で、現一木通りも「わき水が通



引地川改修工事竣工記念
龍宮橋より湘南道路鵠沼橋を望む
護岸根固メ錐筋混泥土欄杭工
校長 250法部錐筋混泥土プロッタ法派
法長 3.20

引地川改修工事竣工記念 龍宮橋より湘南道路鵠沼橋を望む
1934(昭和9)年頃(絵葉書)



引地川改修工事竣工記念
湘南道路より上流を含み

引地川改修工事竣工記念 湘南道路より上流を含む
(龍宮橋横に旅館「塩湯温泉海浜閣」が見える
1934(昭和9)年頃(絵葉書)

りの東側を流れ、道といわれる空地も長い枯れ草が横たわり自転車を押して配達の仕事をするようだった」と思い出話をしてくれた。この一本通りも当時の一木與十郎町長が道路の整備に力を入れ、この功績が一木通り踏切り脇の「中岡耕地整理改功碑」に記されている。この碑は現在、公民館中庭に移されている。

*

余談ではあるが一木町長孫の一木誠氏は私と同級生。二十歳頃テレビでの東洋レーヨンのコマーシャル「セミセミトール、セミスリーブ」のコマーシャルのモデルとなっている。半袖のワイシャツのハシリであった。

(ありた ひろかず)

松岡静雄記念碑

大川 久（会員）

毎朝の犬の散歩の途中、鵜沼海岸 7 丁目 18-18 に大きな碑があるのに気が付いた（昔の浜道から少し入ったところ）。

その前面には「松岡静雄先生之庵址」と刻まれている。こういう立派な石碑が建つということは、松岡静雄は皆から相当慕われた高名な先生に違いないと思った。今では石碑がやや傾いているように見え、手入れが行われているとは思えない。後ろに回って刻まれている碑文を見てみた。読みにくいので現代文にすると次のように書かれている。

「松岡静雄先生は明治 11 年 5 月 1 日兵庫県神崎郡田原村に生まれる。父は操、母はたけ、先生はその七男であり、幼いころから神童とよばれ、成長して海軍に入り日露日独の両戦で手柄を立てた。昇進して海軍大佐になる。先生は国家経綸の対策を胸に南洋の開発に邁進した。大正 7 年予備役となり、いろいろ行うところがあったが、不幸にして病になり、相州鵜沼に移り住んだ。それ以来、俗世界を避け学術に励み多くの著作を残し、学会を驚かせた。



石碑は鵜沼海岸 7 丁目 21 の住居表示のある電柱の奥に少し入った右側にある

昭和 12 年 5 月 30 日 知人門下生有志が建立」と記されている。（原文は会誌『鵠沼』第 23 号、HP 鵠沼地区内の記念碑参照）

松岡静雄が生まれた明治 11 年は西暦 1878 年にあたり、146 年前のことになる。碑が建てられたのが昭和 12 年の 1937 年であり、今から 87 年前になる。松岡静雄が鵠沼に居を構えたのは大正 14（1925）年、99 年前のことである。鵠沼に住んだ 10 年余りの間に 40 冊以上の著作を発表した。

松岡静雄は「松岡五兄弟」の一人として有名である。静雄は 8 人兄弟であるが 3 人は早世している。一番上の兄である松岡鼎は医師、井上通泰は国文学者、柳



松岡静雄先生。常に白髪のかつらをつけていた

田国男は日本の民俗学の第一人者で文化勲章を授与されている。弟の松岡映丘は日本画家で帝国芸術院会員であった。立派な業績を残した兄弟である。

地元兵庫県の姫路文学館の中西進氏は「兄弟に共通するものに覇気がある。長じて我が道を行くことにおいて最たる人物は静雄だったであろう」と述べている。

また、海軍での静雄は、官僚的な軍の体質にはおさまり切れない異端児的な存在であったらしい。「軍の統帥権を内閣に移し、海軍大臣文官制をとらねば国を誤る」との建白書を何度も出したのが上層部の忌避に触れ、異例の大佐のままの

予備役編入（1918 年）となったと松岡静雄の子息が語っている。海軍時代には当時委任統治領であった南方の島々の司令官を務め、島の風俗や言語に大いに関心を示し、島の産業の発展にも寄与した。

病気のため鵠沼に居を移してからは南洋での経験を踏まえ、言語学や民族学への探求に突き進んだ。10 年余りの間に 40 冊以上の研究書を発表したのは驚異的である。ミクロネシア民俗誌、マーシャル語の研究など南方の島々の言語、民族研究、日本の古代史や万葉研究、国語と民族など多岐にわたる。

松岡静雄は自邸を神楽舎（ささのや）と名付けた。なかなか読めない屋号である。近所の農家の人はどこで神楽（かぐら）が見られるのですかと聞いて大笑いしたそうである。

静雄の書斎は池を挟んだ母屋の奥にあった。池には船が浮かび、書斎の前には田畑が広がり、富士山が見えたそうである。今は住宅が密集しその面影はない。とくに若い学生が松岡静雄を慕い、頻繁に神楽舎を訪れるので池の奥の芋畑に十数人入れる大きなテントを張り寝泊まりさせていた。神楽舎は多くの学者、知識人、学生が頻繁に訪れる場所だったのである。特に二二六事件が起こった際は、鵜沼海岸駅から多くの人が松岡静雄邸を訪れる姿があったと伝えられている。

松岡静雄は関東大震災を鵜沼で経験している。当時、鵜沼に避暑滞在中の東久邇宮（ひがしくにのみや）稔彦（なるひこ）王の第二王子師正（もろまさ）王が亡くなり、ご遺体を東京へ送るべく軍艦を相模湾に派遣するよ



現在の住居跡の風景

う手配している。さらに地元で亡くなった遺体を茶毘にふす指導を行ってもいる。これも海軍時代の人脈、経験があったからこそできたのであろう。

鵜沼を語る会の元会長高木和夫氏は、学問ともに政治的事柄に対しても関心を示していた松岡静雄氏について次のように述べている。「いずれにしろ松岡先生は単なる国文学者ではない、彼を支持する人が多かったら先ほどの戦争はなかったろうし、沖縄問題も厚木基地の騒音もなかったであろうという大きな人物であったのです。鵜沼海岸は松岡静雄先生の人物を改めて見直さなければならないと同時に、このような大人物が鵜沼海岸に住んでいたことを誇りにしなければならないと思います。」

来年は松岡静雄が鵜沼に居を構えて100年になる。地元民として松岡静雄の業績を今一度振り返るいい機会になると思う。

（おおかわ ひさし）

「藤沢の巨樹」 鵜沼地区公民館まつりで展示

今年の第 48 回「鵜沼地区公民館まつり」は 10 月 19 日、20 日の土・日曜日に開催され、好天にも恵まれ盛況だった。

鵜沼を語る会は「藤沢の巨樹」をテーマに、12 年前に巡った巨樹の写真を中心に展示発表した。その年度の事業結果を秋の公民館まつりで展示するのが常だが、巨樹めぐりについては未だ展示発表しておらず、実施から 10 年以上たって



の今回の展示発表となった。

藤沢の巨樹に注目し『藤沢の文化財―樹木を訪ねて―』を参考にして、市内 56 箇所、100 本以上の巨樹を巡った。巨樹は神社・稲荷・寺院に多く見られるがすでに数か所で消滅、さらにこの 10 年間で何本か巨樹がなくなっている。

巨樹とは、環境省によれば地上 1.3m の位置で幹回りが 3m 以上の樹木のことで、高さは基準に含まれない。

鵜沼地区の巨樹は烏森と呼ばれてきた皇大神宮、本鵜沼周辺にあり、明治時代に別荘地として開発された橘、藤が谷、桜が岡、松が岡、鵜沼海岸には見られない。もともと別荘地と開発されたところは砂丘列が存在する地形で、開発に伴い黒松が植樹されたが、高さはあるが幹回りが 3m 以上の樹は見当たらない。近くでは片瀬地区と江の島の神社、寺院で多くの巨樹が見られる。

展示会場への来場者の多くはじっくりご覧になり、藤沢市にこれだけ多くの巨樹があることに驚かれた様子だった。「こんなに大きい樹があるなら、ぜひ観に行きたい。場所を教えて欲しい」「これだけまとまったものを Web でみることが出来ればいいのだが」との意見も聞かれ、ゆくゆくは当会の HP で見られるようにすることを考えたい。（文・写真 竹内 広弥）





題字は刀根恵子会員による揮毫

コーヒーズレイク Coffee Break コーヒーズレイク Coffee Break コーヒーズレイク

オンジョ考

鵠沼 122 号に掲載された並木会員の「消え去った鵠沼弁」は大変興味深く読ませてもらった。内容は主に標準語の発音が訛る法則や語尾変化を文法的に述べられていたが、地方独特の固有名詞については、あまり触れられず、唯一「オンジョ＝ギンヤンマ」が紹介されていた。

鵠沼を語る会は 2014 年の公民館まつりに「子どもの頃の遊び」と題して玩具とその遊び方をイラストで展示したことがある。そのなかに「オンジョ捕り」のイラストもあり「雌のヤンマをおとり罠（おとり）に木の枝に蜘蛛の巣を張り雄のヤンマを捕った」（会誌鵠沼 110 号）と紹介されていた。中部地方出身の筆者は初めて聞く方言で珍しく思ったものである。

では、ヤンマのことをオンジョというのは、鵠沼を含むどの範囲で使われていた（いる）のだろうかという疑問が湧いてネットで調べ始めた。

まず第一に茅ヶ崎でもヤンマをオンジョと呼ぶことが分かった。それは「オンジョ飛ぶ空のもと」サブタイトル“茅ヶ崎・清水谷の自然とくらし”という本が出版されていることを見付けたからである。

次にオンジョが現れたのは、福井県の大島半島に逸見氏の城としてオンジョ城というのがあった。カタカナ表記で漢字ならどんな字を当てるのか不明である。

その次が、島根県の事例である。島根県立古代出雲歴史博物館が収集したわらべ歌（松江市）にあり、オンジョ：ヤンマを指す出雲方言とある。

こいし こい こな おんじょ こい

あぶら や みたお（めとう） に

まけて にげる おんじょ

はじだ ないかや 1993 年刊



「おんじょ釣りはヤンマのめとう（雌）を 50 c m位の糸で縛り 1m くらいの竹竿に結びくるくる回しながら交尾の本能を利用して地上まで誘い込み手で捕まえる」という解説があり、鵠沼の捕り方とちょっと違うが雌を罠に雄を捕るのは同

コーヒーズレイク Coffee Break コーヒーズレイク Coffee Break コーヒーズレイク

コーヒーブレイク Coffee Break コーヒーブレイク Coffee Break コーヒーブレイク

じである。歌詞の大意は“来い来いヤンマ来い、雌に負けて逃げるヤンマよ、恥ずかしくないかい”という囀りに絡んでこないヤンマを揶揄する内容で面白い。

また国立文化財機構 東京文化財研究所が 2021 年 6 月 30 に採集したデータに

民俗語彙：オンジョ

分 類：昆虫など

キーワード：トンボ

採集地：島根県八束郡八束町で採集語はシオカラオンジョ

ここではオンジョは広くトンボを指すようでシオカラトンボをシオカラオンジョというらしいのである。

三番目に現れたのは、鹿児島県であるがここではトンボではない。鹿児島弁ネットワークによると

オンジョ：お年寄り、老人（男性）

語源として、おん：御または翁 じょ：尉（じょう＝能で老翁をいう）ではないかとしている。同じ鹿児島県でも川内市の南方神社の祭りに「太郎太郎踊り」というのがあって主人公の太郎の祖父オンジョ（雲上）が登場する。オンジョの意味は老人であろう。

鹿児島県屋久島町口永良部島の伝説にオンジョ：おじさん、おじいさんのことでタケノコオンジョとかカライモオンジョとかいう。カライモオンジョはカライモが不作という意味だそう。

鹿児島弁辞典というサイトでは「オンジョ：老人」の派生語として

オンジョドイ：老鶏

オンジョニセ：元気な老人

オンジョボネ：老骨、老身

オンジョミト：老夫婦

オンジョンボ：夫婦、老夫婦

が挙げられている。

オンジョンボは夫婦の意味で宮崎県でも使われているようである。

以上の事柄は、ネット検索のみに依ったもので、まだ隠されたオンジョがどこかに存在するかも知れない。方語は本来、人から人へ口伝てに伝わる間に少しずつ変化していくものだから土地の連続性は無視できない要素の筈である。

ヤンマを指すオンジョが南関東の一部と本州の果て島根県でしか事例がないのはいかにも不自然で解せないが、興味深い謎ではある。 (T.O)

コーヒーブレイク Coffee Break コーヒーブレイク Coffee Break コーヒーブレイク

コーヒーズレイク Coffee Break コーヒーズレイク Coffee Break コーヒーズレイク

湘南海岸がマイアミビーチと呼ばれた頃

今年は藤沢市とアメリカ・フロリダ州のマイアミビーチ市の姉妹都市提携 65 周年に当たる。鵠沼郷土資料展示室では提携の経緯や行事などを紹介した展示が 3 月から 9 月まで行われた。

発端は、戦後のアメリカ駐留軍の兵士が鵠沼海岸などに遊びに来た時に「マイアミのようだ!」と話していたことにあるらしい。当時は日本が高度成長に向かう頃で湘南海岸は手ごろな避暑地として人気を集めていた。小田急や江ノ電は通勤地獄並みの混雑であった。

夏場に大きな家は、企業に「海の家」として貸し出し、鵠沼海岸商店街は大いに賑わった。土日の夕方は、海水浴から戻った皆が一斉に風呂の湯を沸かすため水道の出が悪かった。

私にとって海水浴は手ごろな遊び場だった。波打ち際で砂のお城を作り、板切



れで波乗りをするのが楽しかった。最盛期には小型飛行機が海水浴客に宣伝用の菓子を落下傘で落とし、取り合いに夢中になった。

しかし、9 月に入ると人は一斉にいなくなり、静かな浜辺に戻るのであった。

ところが、現在の湘南の海はサーファー天国に代わり、今や、マイアミからハワイの雰囲気へと変わった。(大川 久)

片瀬東浜 人出で砂浜が見えない(昭和 30 年代)

コーヒーズレイク Coffee Break コーヒーズレイク Coffee Break コーヒーズレイク

六本松古戦場

有田 裕一(会員)

ここに、「(藤澤名所) 神明ノ森(六本松) (川上書店発行)」と書かれた大正時代の物と思われる絵葉書がある(写真1)。この絵葉書の画面よく見ると、右手遠方に烏森の森が見える。民家は一軒もなく、全くの原野である。目を凝らしてみると一本の松の根元に石碑が建っている。形状からして江の島道の道標のように見える。もちろん800年以上前の松の木がそのまま残っているとは思えないが、何回かの植替えがあったと考えるのは無理であろうか。



藤澤名所 神明ノ森(六本松) との説明 (写真1)

この一枚の古い絵葉書を見るにつけ、この何本もの松の木は、藤沢の何処かという疑問が頭から離れず、調べてみようと思った。

藤沢駅から湘南高校、第一中学校へ向かって北西に延びる「中学通り」があり小田急線をくぐる辺りに本町小学校がある。その校庭に大きな松の木が何本もあるのを小田急線の車窓から見ている。

本町小学校や藤沢老人ホーム辺り(もっと広い範囲)が「六本松古戦場」と言われているところで、まずはこの松の木を見に行ってみた。本町小学校で許可を得て校庭にある3本の松の木を撮影した。いずれも立派な松



本町小学校校庭の立派な松の木 (写真2)



(写真2)で、古い絵葉書に映っているのは、これらの松ではないかという思いが、一層強くなった。

現在、藤沢の名所「六本松古戦場」と紹介されているのは、本町小学校に隣接したところにある 10 m²ほどの場所（湘南通一丁目町内会会館前）で、各所に散らばっていた石碑、石塔が集められ供養のためのお地蔵様が何体かつくられている(写真3)。案内板には次のように書かれている。

史跡の由来 六本松古戦場

「此の所は治承四年伊豆に旗上げた頼朝が鎌倉へ討ち入りの折り大庭三郎景親（原文ママ）の軍勢と一進一退の激戦を交え敵味方共に多数の勇士が討ち死にされました。此の所の住民はねんごろに供養したのが六本松の塚である。

玉垣に緑したたる六本の松は其の昔を語り供養の香華はその御霊をなぐさめていた。時うつりて塚の姿もいつしか消え消失しようとした。

藤沢市関係者の計らいで再び旧姿を取り戻すことが出来た。

心ある方の供養をのぞみます」

湘南通り一丁目町内会六本松史跡保存会



六本松古戦場跡の石碑・石塔（写真3）

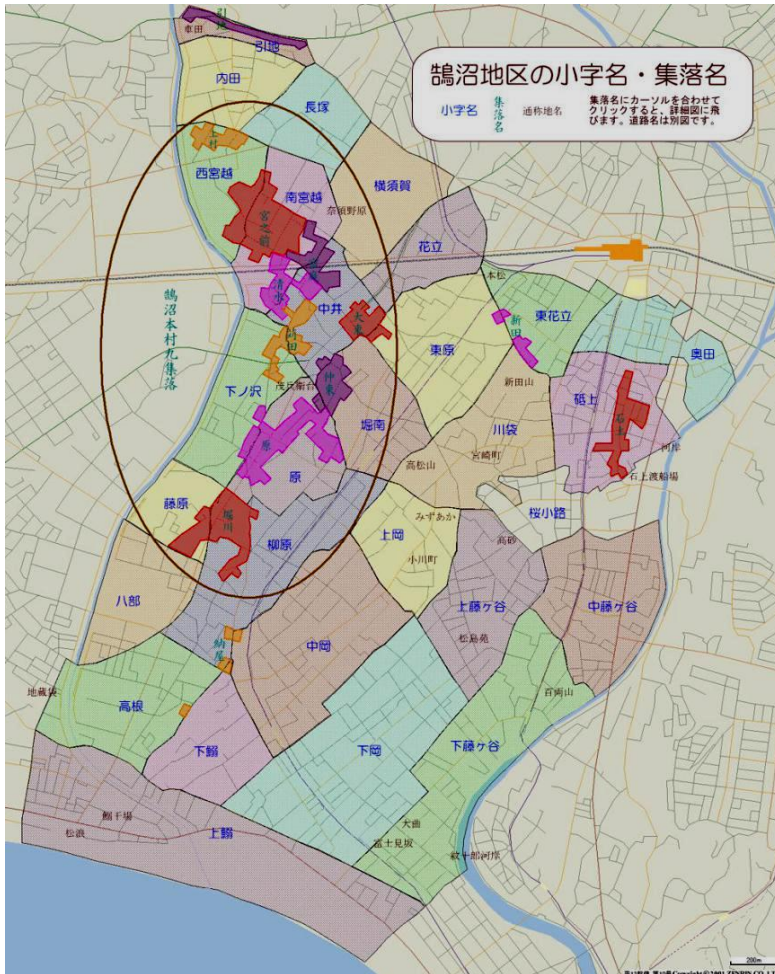
六本松史跡保存会の方にお会いして、六本松古戦場についてもっと詳しいことを聞いたのだが、この場所を整備したとき人骨などが掘り出された、NHKが大河ドラマ『鎌倉殿の13人』の放映に合わせ、現地取材に来たということ以外、特に新しいことは聞けなかった。

源頼朝の鎌倉入りを阻止すべく大庭景親との戦いが繰り広げられた（両者の戦いはこれ以前にも石橋山の戦いがある）。この平安末期の治承4(1180)年の大庭景親の周辺のことを鎌倉幕府正史『吾妻鏡』に見ると、治承4年9月3日の条で大庭景親は源家譜代の御家人でありながら「今度所々に於て射奉るの次第」

明治初期の鵜沼村居住者

今年度の例会で度々、明治時代の鶴沼の住居に戸別番号が付けられていたことが話し合われた。そこで資料を集めどようになっていたのか調べてみた。

1970年代に有賀密夫氏が旧鵜沼村の戸別番号がつけられた家の現状を調査をされた。その結果、世帯数は285世帯だろうということが判明した。



江戸時代の鵠沼村は14の集落に分かれていた。明治維新直後の1870(明治3)年の鵠沼村戸口資料によると、鵠沼村の各戸に1番から267番までの戸別番号がつけられていた。1870年の実際の戸数は、285戸と記録されている。同一家屋に2～3世帯が暮らしていたり離れが建っていても同一番号になっているというケースがあるからである。

戸別番号は、上村（かむら）の宮崎家を1番とし、1-11が上村、12-57が宮ノ前、58-71が宿庭（しゆくにわ）、72-91が清水となっている。

上図は鵜沼を語る会の HP (<https://kugenuma.sakura.ne.jp>) の「鵜沼地図」の項目に掲載されたもので、14 の集落の場所をクリックすると戸別番号が記入された地図が検索できる

ここまでが皇大神宮の例祭に社前に幟を立てる 4 町内である。続いて 92-118 が菟田、119-157 が原、158-178 が堀川、179-184 が納屋(なんや)と、次第に南

下し、ここから北に反転して 185-201 が仲東(なかひがし)、202-220 が大東、さらに 221-227 が新田(しんでん)、228-239 が石上と東進し、最後に 240-267 が最北部の引地(車田を含む)となっている。

この 14 集落が明治初期に人が住んでいた場所ということになる。

明治初期の鵜沼村居住者の姓

有賀密夫氏の調査では明治初年段階での戸主名と屋号が調べられている。現在でも本鵜沼や鵜沼神明居住者には、同姓の方が多いことに気付く。明治初期はさらに限られたものであった。一番多い姓は関根で次いで浅場、山口であった。10 戸以上の姓は次の通り。

- 1 位 関根 34 戸 (宮ノ前 11 宿庭/苅田 6 清水 3 上村 2 清水 3 上村 2 原 1)
- 2 位 浅場 24 戸 (宮ノ前 2 清水 2 苅田 3 原 4 堀川 9 仲東 3 引地 1)
- 3 位 山口 23 戸 (宮ノ前 1 苅田 6 原 2 納屋 2 大東 10 石上 1 引地 1)
- 4 位 宮崎 21 戸 (上村 7 宮ノ前 6 清水 1 堀川 3 仲東 2 引地 2)
- 4 位 渡邊 21 戸 (宮ノ前 5 宿庭 1 清水 4 原 6 堀川 2 仲東 1 大東 2)
- 5 位 森井 15 戸
- 6 位 小林 13 戸
- 7 位 宮澤 12 戸
- 8 位 齊藤 11 戸

1870(明治 3)年の鵜沼村戸口資料にある 285 戸のうち、関根家は 34 戸を数え 1 位である。この時代の鵜沼村の 12%が関根家だということになる。この点では、旧家でありながら 1 戸しか掲載されていない高松家と好対照である。

また、関根家の所在を見ると、鵜沼村の北半分に分布している。この点では、南に分布の中心がある浅場家と好対照である。その職業も、名主や豪農があったり、網元(2 戸)や諸問屋があったりと様々である。

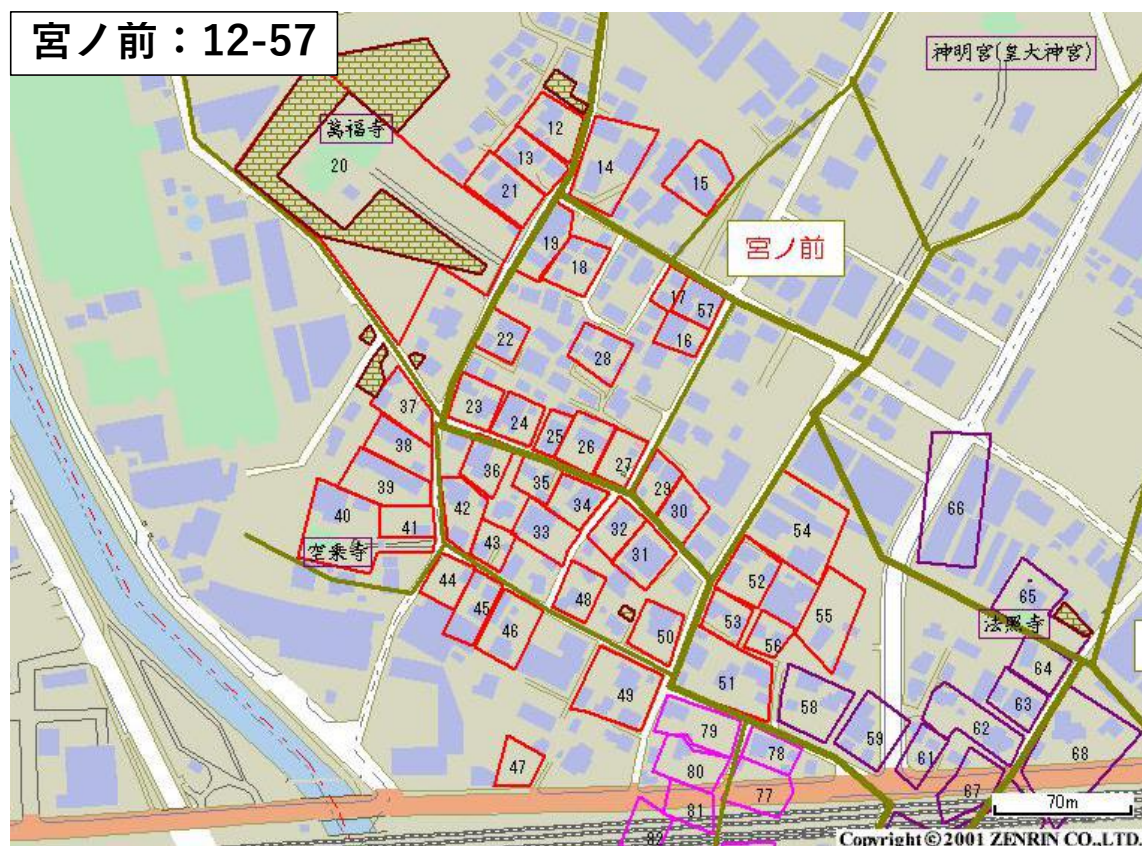
<参考> 有賀密夫「明治初期の鵜沼村」『わが住む里』第 43～45 号 (1992～1994)
鵜沼を巡る千一話 鵜沼を語る会 HP

鶴沼を語る会 HP の鶴沼地図を開き集落名をクリックすると、戸別番号が記載された 14 の集落の地図が見られる。

上村：1-11

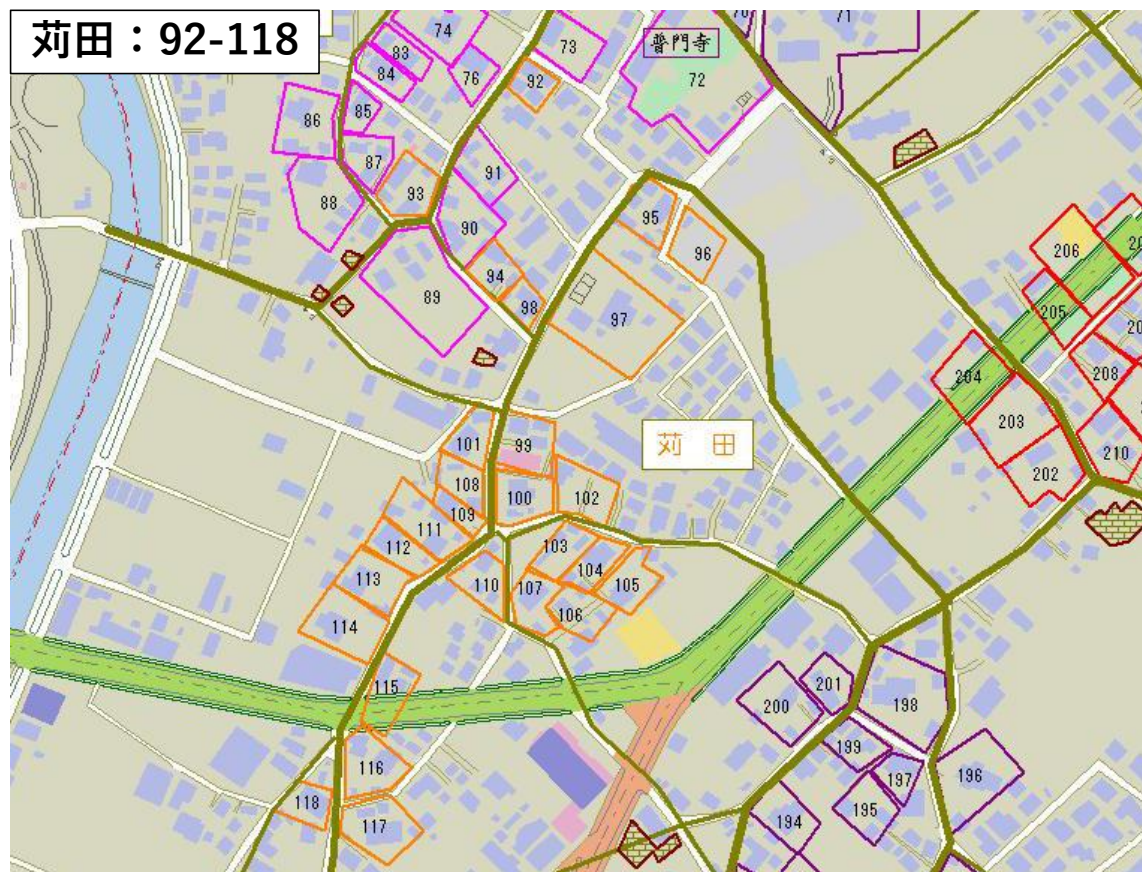


宮ノ前：12-57

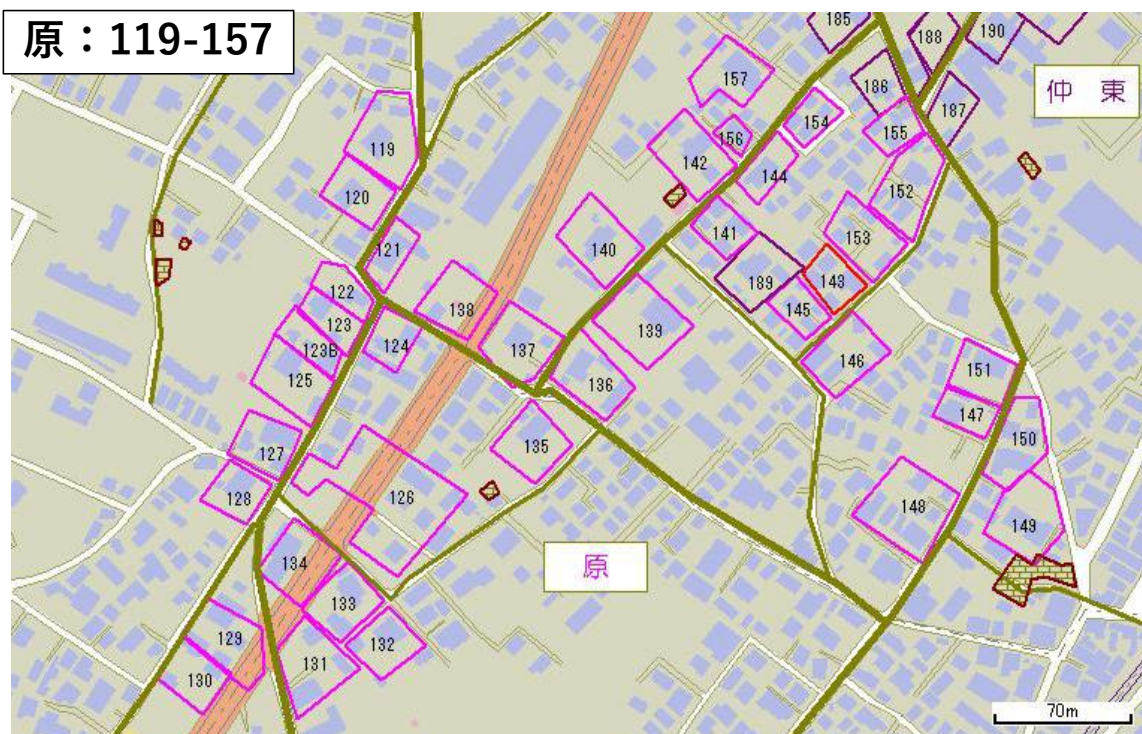


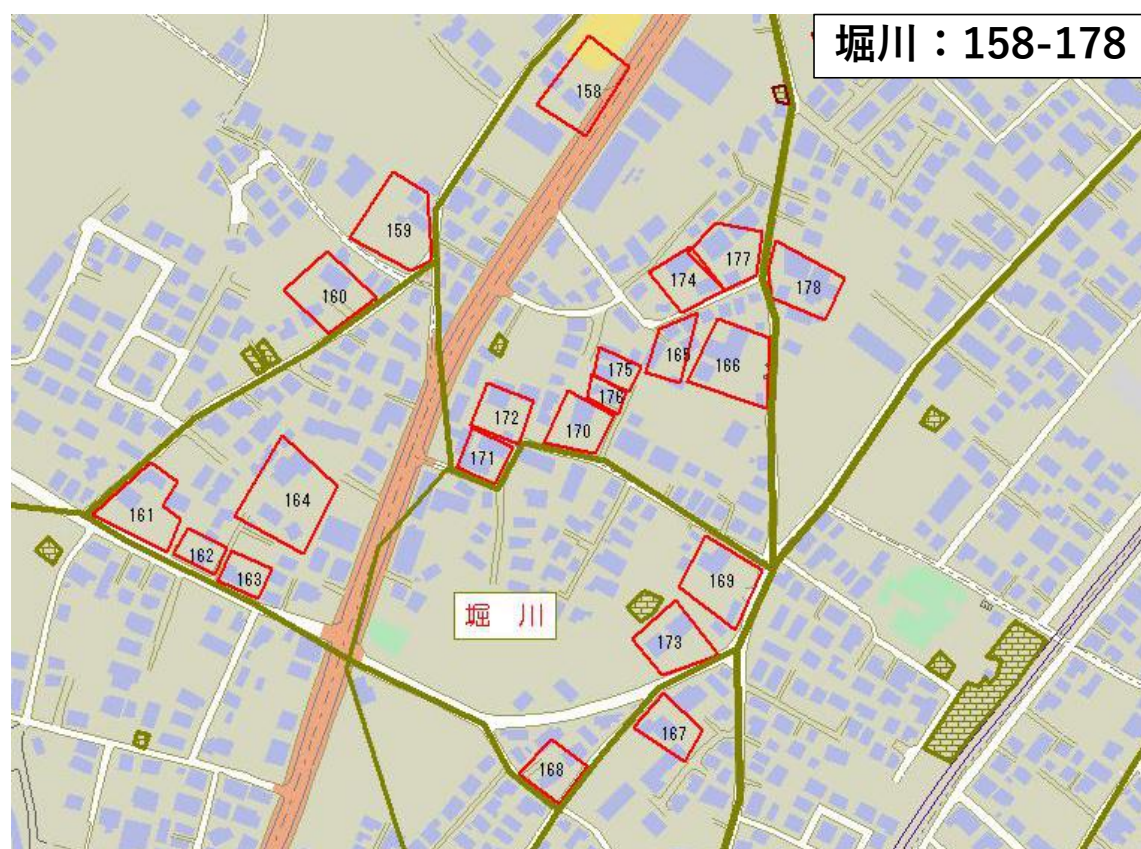


荻田：92-118



原：119-157

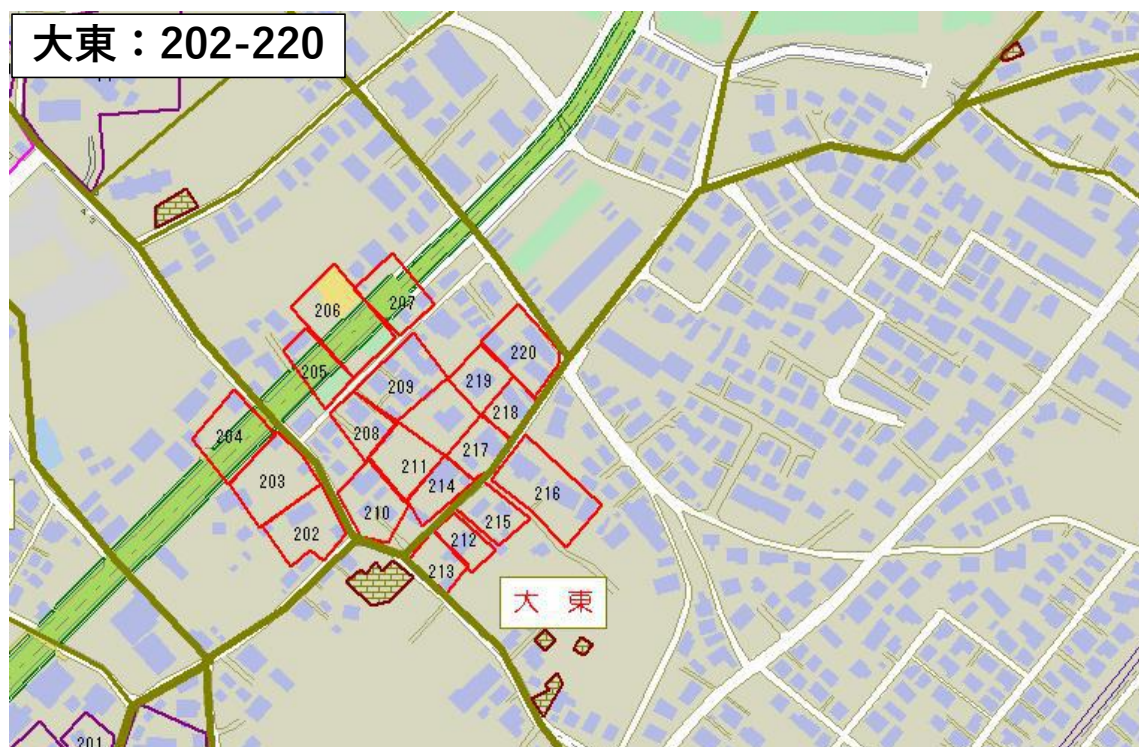


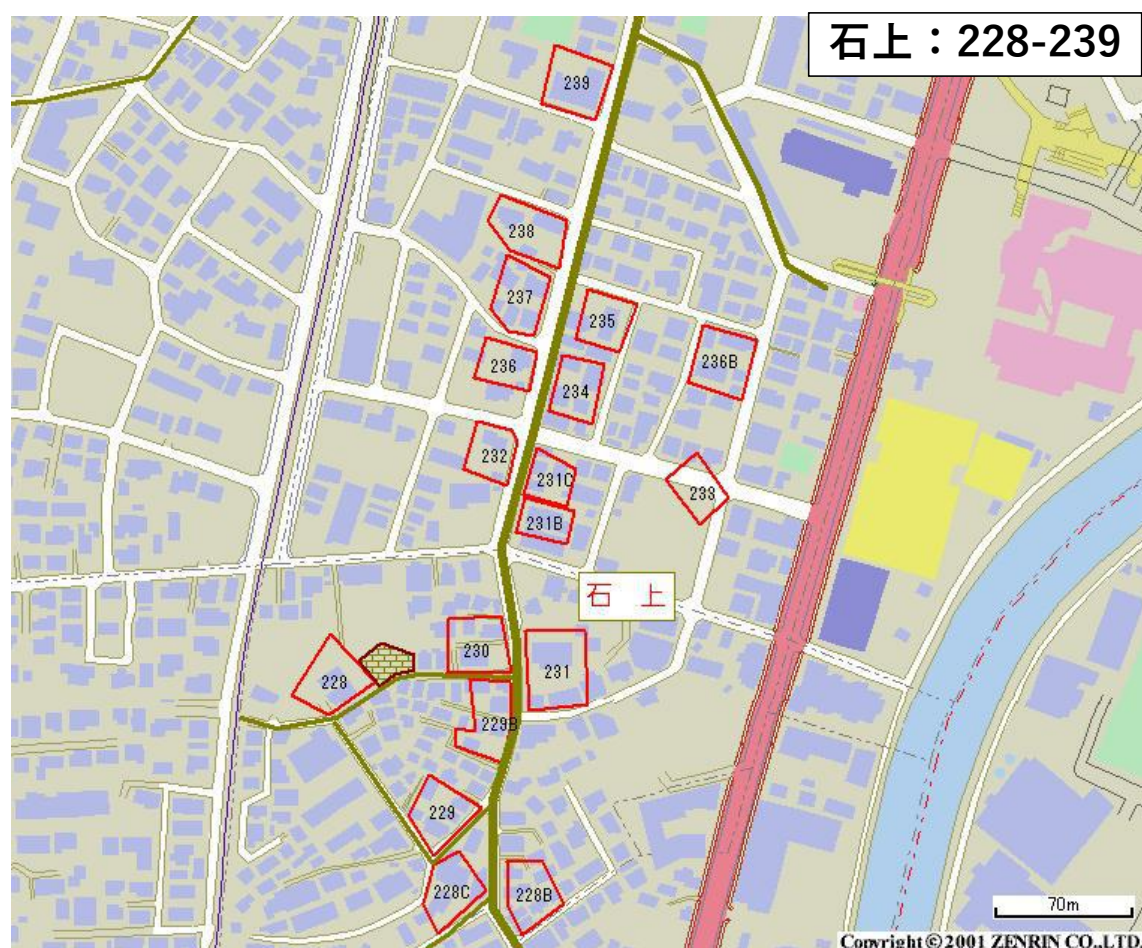


仲東：185-201



大東：202-220





引地(車田含む) : 240-267



次ページ以降は明治初期の居住者一覧を掲載。

戸別番号(コード)、集落、姓、戸主名、屋号、職業を明記したもので興味深い。

明治初期の上村(かむら)居住者

コード	集落	姓	戸主名	屋号	備考	通し
1	上村	宮崎	源右衛門	あらや		1
2	上村	宮崎	重左衛門	重ぜむさま		2
3	上村	小菅	三五郎	おおいり		3
8	上村	小菅	清右衛門	たるぜいむさん ／清右衛門さん		8
9	上村	宮崎	清四郎	松兵衛様	富農	9
10	上村	宮崎	所右衛門	所右衛門様		10
11	上村	宮崎	権左衛門	ごんぜむさん	豪農	11

明治初期の宮ノ前(みやのまえ)居住者

コード	集落	姓	戸主名	屋号	備考	通し
12	宮ノ前	須藤	林右衛門	はずれ		12
13	宮ノ前	須藤	久左衛門	中		13
14	宮ノ前	土方	四郎衛門	こうえもんさん		14
15	宮ノ前	岩田	徳兵衛	ねぎ徳さん／げ いど		15
16	宮ノ前	宮崎	初五郎	むけえ		16
17	宮ノ前	宮澤	傳兵衛	にいや		17
18	宮ノ前	小林	伊兵衛	うえの家／諸榮	諸問屋	18
19	宮ノ前	土方	藤兵衛	七兵衛様／玉子	元玉子屋	19
20	宮ノ前	荒木	良空	萬福寺	僧侶(萬福 寺二三世)	20
21	宮ノ前	関根	庄右衛門	大門		21
22	宮ノ前	小林	奎左衛門	下の奎左衛門さ ん／時計屋	元時計屋	22
23	宮ノ前	山口	太兵衛	太兵えさん		23
24	宮ノ前	渡邊	平四郎	みつや		24
25	宮ノ前	小林	清四郎	国さん		25
26	宮ノ前	小林	清右衛門	しんや		26
27	宮ノ前	松田	與右衛門	松田さん		27
28	宮ノ前	小林	八郎衛門	八えもんさん		28
29	宮ノ前	土方	惣右衛門			29
30	宮ノ前	宮崎	傳四郎	傳四郎さま		30
31	宮ノ前	高橋	利兵衛	利兵衛さん／新 さん		31

32	宮ノ前	宮崎	助左衛門	市松つあん		32
33	宮ノ前	渡邊	丑右衛門	丑大工さま	大工	33
34	宮ノ前	渡邊	平兵衛	助さんねと助さん		34
35	宮ノ前	関根	新五兵衛			35
36	宮ノ前	関根	市郎右衛門	又兵衛屋敷		36
37	宮ノ前	林	萬右衛門	ゆうや(湯屋)	元湯屋	37
38	宮ノ前	小林	三右衛門	さえむさん		38
39	宮ノ前	関根	庄三郎	清べえさま		39
40	宮ノ前	大橋	門龍	空乗寺	僧侶(空乗寺三三世)	40
41	宮ノ前	金堀	縫之助	神主	神明宮神主	41
42	宮ノ前	関根	卯之助	大門(→大橋)		42
42	宮ノ前	渡邊	吉兵衛	たきちゃん店		43
43	宮ノ前	渡邊	重左衛門	しんや		44
43	宮ノ前	板橋	え以	しんや		45
44	宮ノ前	関根	兵右衛門	ひょうえむさん		46
45	宮ノ前	関根	彦兵衛	午さん		47
46	宮ノ前	関根	孫八	孫八様		48
47	宮ノ前	関根	佐五兵衛	かしば(河岸場)		49
48	宮ノ前	関根	喜兵衛	きべいさん		50
49	宮ノ前	小林	佐右衛門	さいもんさん		51
50	宮ノ前	上野	太左衛門	烙炉屋	元烙炉屋	52
51	宮ノ前	浅場	弥五兵衛	やごべいえさま		53
52	宮ノ前	宮崎	多津	下ちょ(町)		54
53	宮ノ前	宮崎	源右衛門			55
54	宮ノ前	浅場	武右衛門	ぶえむさま／た	元種苗商	56
55	宮ノ前	永井	仁左衛門	奥(おき)		57
56	宮ノ前	関根	市左衛門	市っちゃん／ごうど		58
57	宮ノ前	宮崎	勘次郎	勘ぜむさん		59

明治初期の宿庭(しゅくにわ)居住者

コード	集落	姓	戸主名	屋号	備考	通し
58	宿庭	関根	勘左衛門	かんぜむさん		60
59	宿庭	関根	重五郎	重さん(重五郎様)		61
60	宿庭	鈴木	半十郎	半じろ様		62

61	宿庭	鈴木	又右衛門	又いむ様		63
62	宿庭	関根	安左衛門	安さん／権さん		64
63	宿庭	関根	金左衛門	金じろう様		65
64	宿庭	関根	六右衛門	はずれ／神主	神主	66
65				法照寺	僧侶(法照寺二五世)	67
	宿庭	中村	快道			
66	宿庭	宮澤	平兵衛	どや		68
67	宿庭	新堀	繁次郎	番多		69
67	宿庭	渡邊	吉三郎	まえむさん		70
68	宿庭	山上	八左衛門	山上さん(山上本家)	豪農	71
69	宿庭	山上	八十吉	しんや		72
70	宿庭	林	傳八	豆腐屋	豆腐屋	73
71	宿庭	関根	傳左衛門	大関根(関根本家)／醬油屋	鵜沼村で2番の大地主	74

明治初期の清水(しみず)居住者

コード	集落	姓	戸主名	屋号	備考	通し
72	清水	生田	浄耕	普門寺	僧侶(普門寺五二世)	75
73	清水	小林	三左衛門	蔵屋敷	富農	76
74	清水	齋藤	孫兵衛	池田屋	雑貨商	77
75	清水	山上	新右衛門	しんえむさん／らうや	羅宇屋	78
76	清水	宮崎	彦次郎	彦さん		79
77	清水	渡邊	小兵衛	こへえさん		80
78	清水	山上	徳次郎	石さん		81
79	清水	高橋	半左衛門	半ざいさん／とうふや	豆腐屋	82
80	清水	高橋	舛右衛門	舛えむさん		83
81	清水	関根	惣四郎	惣四郎さん／しんけ	網元	84
82	清水	関根	太郎左衛門	幸八ちゃん		85
83	清水	渡邊	長八	市べいさん／市ちゃん		86
84	清水	渡邊	兼吉			87
85	清水	渡邊	六左衛門	くぼ(窪)		88
86	清水	近藤	甚八	清さん		89

87	清水	浅場	平左衛門	八ちゃん		90
88	清水	浅場	八左衛門	川端		91
89	清水	関根	伊兵衛	伊べいさま		92
90	清水	小菅	金七	油屋	元油屋	93
91	清水	近藤	喜右衛門	みしさん		94

明治初期の荻田(かりた)居住者

コード	集落	姓	戸主名	屋号	備考	通し
92	荻田	浅場	太右衛門	太右衛門様／諸敬さん	諸問屋	95
93	荻田	浅場	奎右衛門		豪農	96
94	荻田	関根	六治郎	六さん／屋根屋		97
95	荻田	齋藤	弥五右衛門	やごえむさん		98
96	荻田	齋藤	権左衛門	権ぜむさん		99
97				大齋藤／南（齋藤本家）	鎌倉時代に三河から移住した旧家。名主を務める	100
	荻田	齋藤	六左衛門			
98	荻田	浅場	権左衛門	ごんべいさん		101
99	荻田	関根	甚八	はしど（橋戸）		102
100	荻田	内田	善太郎	魚善／でかもとさん	網元？	103
101	荻田	関根	金次郎	ごろえむさん		104
102	荻田	小森	九左衛門	せど		105
103	荻田	山口	伊左衛門	にいや（仁屋）	鮮魚商	106
104	荻田	山口	金兵衛	金べいさま（仲買）		107
105	荻田	山口	久七	幸ちゃん		108
106	荻田	齋藤	次郎左衛門	いんきよ（隠居）		109
107	荻田	山口	六兵衛	ろくべえさま		110
108	荻田	内田	嘉右衛門	かえむさん		111
109	荻田	内田	金蔵	寄り場	魚仲買人	112
110	荻田	山上	茂助	桶屋	元桶職人	113
111	荻田	齋藤	七兵衛	しんだな		114
112	荻田	関根	長右衛門	長えむさま		115
113	荻田	関根	佐七	佐七さま／諸國	諸問屋	116
114	荻田	関根	平次郎	へっさま		117

115	荻田	山口	長八	どうこ屋	118
116	荻田	内田	六右衛門	六えむさま	119
117	荻田	山口	半右衛門	半えむさま	120
118	荻田	内田	喜三郎	上総屋	121

明治初期の原(はら)居住者

コード	集落	姓	戸主名	屋号	備考	通し
119	原	山口	久平	久平さま		122
120	原	山口	久義(蔵?)	おてんとうさま		123
121	原	関根	佐十郎	作えむさま		124
122	原	渡邊	徳次郎	しんや		125
123	原	渡邊	勘右(左)衛門	酒屋	元酒屋	126
123				新屋敷	30石弱を	127
	原	浅場	勇次郎		生産する 豪農	
124	原	林	源助	石倉		128
125	原	渡邊	伊兵衛	市えむさん		129
126				浅場屋敷	明治初期 に66石余 を生産す る村一番 の豪農	130
	原	浅場	太郎右衛門			
127	原	渡邊	市左衛門	おでんきさん		131
128	原	浅場	定次郎	あらやしき		132
129	原	浅間	作五兵衛	ぶちや	綿栽培	133
130	原	渡邊	庄左衛門	しも(下)		134
131	原	葉山	與兵衛	堀川網	網元	135
132	原	小林	三右衛門	まめや		136
133	原	小林	紋左衛門	紋左		137
134	原	小林	森右衛門	もりえむさん		138
135	原	林	佐五右衛門	源七さま		139
136	原	林	彦八	彦左衛門さま		140
137	原	林	彦右衛門	きーやさん		141
138	原	林	又兵衛	又兵衛さん		142
139	原	榛葉	友右衛門	しんや／繁さん		143
140	原	榛葉	久右衛門	西(榛葉本家)		144
141	原	齋藤	清次郎	清次郎屋敷		145
142	原	榛葉	澤右衛門	酒屋	元酒屋	146
143	原	森井	四郎右衛門			147
144	原	渡邊	長十郎	諸長さん	諸問屋	148

145	原	森井	儀右衛門	五郎兵さん		149
146	原	森井	藤兵衛	にいや		150
147	原	森井	太郎兵衛	かごや	元籠屋	151
148	原	森井	武右衛門	寄り場	魚仲買人	152
149	原	橋本	六兵衛	ろくべいさん／ げんかくさん		153
150	原	森井	藤左衛門	藤七様		154
151	原	森井	武左衛門	武ざいむさん		155
152	原	森井	清吉	ぶちや	綿栽培	156
153	原	森井	治右衛門	うわつかた		157
154	原	浅場	文四郎	新屋敷		158
155	原	橋本	與左衛門	あらや／木挽	大工棟梁	159
156	原	齋藤	五右衛門	五えむさま		160
157	原	岩下	忠右衛門			161

明治初期の堀川(ほりかわ)居住者

コード	集落	姓	戸主名	屋号	備考	通し
158	堀川	宮崎	長五郎	長五郎さん		162
159	堀川	田中	佐右衛門	半べいさま		163
160	堀川	葉山	六兵衛	チビ六さん		164
161	堀川	竹内	新左衛門	大西		165
162	堀川	竹内	平次郎			166
163	堀川	葉山	伊兵衛	孫八		167
164	堀川	葉山	又兵衛	又兵衛さん／西		168
165	堀川	浅場	金四郎	しんや／あんま さま	元按摩	169
166	堀川	浅場	清五郎	あらや／でい		170
167	堀川	渡邊	藤十郎	隠居		171
168	堀川	浅場	七郎右衛門	大清さん	大工	172
169	堀川	浅場	三十郎	文七さん	富農	173
170	堀川	浅場	吉右衛門	にいや		174
171	堀川	板橋	四平	大工さん	元大工	175
172	堀川	板橋	忠右衛門	中庭		176
173	堀川	浅場	金兵衛	金べいさま		177
173B	堀川	浅場	定次郎	しんや		178
174	堀川	宮崎	又左衛門			179
175	堀川	浅場	清四郎			180
176	堀川	浅場	重兵衛	重べいさま		181
177	堀川	宮崎	紋十郎	かごや	元籠屋	182
178	堀川	渡邊	仙右衛門	けろうさま		183

明治初期の納屋(なんや)居住者

コード	集落	姓	戸主名	屋号	備考	通し
179	納屋	山口	権左衛門	久四郎様/向かい		184
180	納屋	番場	平次郎			185
181	納屋	番場	元右衛門	松つあん		186
182	納屋	神原	平左衛門	上の家		187
183	納屋	山口	紋左衛門	下の家		188
184	納屋	山崎	與左衛門	はずれ		189

明治初期の仲東(なかひがし)居住者

コード	集落	姓	戸主名	屋号	備考	通し
185	仲東	加藤	茂兵衛	大勝	大工	190
186	仲東	中山	幸左衛門			191
187	仲東	高橋	勘左衛門	かんぜむさん／		192
188	仲東	高橋	小左衛門	バラ山	木挽棟梁	193
189	仲東	高橋	幸右衛門	連ちゃん		194
190	仲東	高橋	吉五郎	幸ちゃん		195
191					平安末に住み着いた元修験者。村長・初代藤沢町長を出す名家	196
	仲東	高松	祐重			
192	仲東	上田	清左衛門	清六さん／酒屋		197
193	仲東	関根	権右衛門			198
194	仲東	中村	徳兵衛	さつまさま		199
195	仲東	森井	文左衛門			200
196	仲東	山田	四郎右衛門			201
197	仲東	宮崎	嘉七	しんや		202
198	仲東	宮崎	次郎左衛門	源四郎様		203
199	仲東	上田	忠左衛門			204
200	仲東	上田	吉右衛門	やぶ中		205
201	仲東	小林	角左衛門			206

明治初期の大東(おおひがし)居住者

コード	集落	姓	戸主名	屋号	備考	通し
-----	----	---	-----	----	----	----

202	大東	関根	茂右衛門	隠居	網元(東網)	207
203	大東	山口	庄右衛門	醤油屋／かんき	元醤油屋	208
204	大東	山口	平左衛門	にいや／入・牛屋	富農／牛飼育?	209
205	大東	山口	源左衛門			210
206	大東	山口	彦四郎	中入り		211
207	大東	山口	新蔵	大入り		212
208	大東	山口	六郎右衛門	けいど		213
209	大東	山口	孫兵衛	入		214
210	大東	森井	作左衛門	大正網	網元	215
211	大東	森井	徳次郎			216
212	大東	山口	清右衛門	たるや		217
213	大東	高橋	吉三郎	はずれ		218
214	大東	山口	市左衛門	たるや(大工)	元大工	219
215	大東	森井	佐兵衛	お茶屋(休息	元茶屋	220
216	大東	山口	平右衛門	あらや／川端		221
217	大東	森井	武兵衛	豆屋	豆屋	222
218	大東	森井	太兵衛	太べいさん		223
219	大東	渡邊	三左衛門	堀端		224
220	大東	渡邊	傳右衛門	川端		225

明治初期の新田(しんでん)居住者

コード	集落	姓	戸主名	屋号	備考	通し
221	新田	滝澤	孫兵衛			226
222	新田	八木	平八	納屋		227
223	新田	平本	権兵衛	ぼくりょうや／	薬種採取	228
224	新田	杉浦	喜右衛門	中ぼう		229
225	新田	関野	傳右衛門	通り		230
226	新田	吉澤	友右衛門	ぼくりょうや	薬種採取	231
227	新田	杉浦	喜兵衛	しんや		232

明治初期の石上(いしがみ)居住者

コード	集落	姓	戸主名	屋号	備考	通し
228	石上	宮澤	長右衛門	せど	豪農	233
228	石上	宮澤	平兵衛	川端		234
228	石上	山口	庄蔵	川向かい		235
229	石上	宮澤	萬次郎	前		236
229	石上	宮澤	卯之助	下の家		237
230	石上	宮澤	七郎右衛門	長七さん		238

231	石上	宮澤	源左衛門	長屋門	名主	239
231	石上	大澤	源助			240
231	石上	広田	吉兵衛			241
232	石上	宮澤	喜右衛門			242
233	石上	宮澤	松兵衛	谷戸		243
234	石上	鈴木	安兵衛	安さん		244
235	石上	宮澤	市兵衛			245
235	石上	宮澤	熊次郎	熊さん		246
236	石上	須藤	市郎右衛門	奥田		247
236	石上	須藤	藤次郎			248
237	石上	須藤	勘左衛門	しんや		249
238	石上	加藤	彦十郎			250
238	石上	安齋	虎吉			251
239	石上	田中	小七	正後屋	製材業／ 富農	252

明治初期の引地(ひきち)居住者

コード	集落	姓	戸主名	屋号	備考	通し
240	引地	榎本	平右衛門	角店	茶屋	253
241	引地	小島	長四郎			254
242	引地	齋藤	勘兵衛			255
243	引地	宮崎	忠兵衛	傘屋	傘張り業	256
244	引地	小林	仙吉	大野屋	米穀商	257
245	引地	黒瀬	新右衛門			258
246	引地	齋藤	市蔵	あめや	飴屋	259
246	引地	山下	亀二郎		貸し店	260
247	引地	山口	九兵衛			261
248	引地	関根	市兵衛	あらや		262
248	引地	関根	庄八			263
249	引地	井上	伊兵衛		穀物商	264
250	引地	小菅	茂左衛門			265
251	引地	宮崎	仁右衛門			266
252	引地	小菅	與三郎	小松屋	団子屋	267
253	引地	加藤	徳右衛門	伏見屋	酒屋／地 主で豪農	268
253	引地	森井	豊次郎			269
253	引地	齋藤	傳八			270
253	引地	吉田	亀次郎			271
253	引地	相原	茂兵衛		仕立屋	272
254	引地	榎本	源右衛門			273

255	引地	関根	庄右衛門	引地の関根	地主で豪	274
256	引地	榎本	庄兵衛	○金	菓子製造	275
256	引地	加藤	角次郎			276
257	引地	三觜	清右衛門	角屋	団子屋	277
258	引地	槇石	磯七			278
259	引地	榎本	善右衛門			279
260	引地	榎本	善五郎		小間物屋	280
262	引地	田村	幸次郎			281
265	引地	池田	米吉			282
265	引地	浅場	奎次郎			283
267	引地	吉田	久吉			284
267	引地	高橋	幸右衛門			285

<明治初期の鵜沼村> 有賀密夫氏調査

「相模国八十八ヶ所」情報の一部アップデート

浅場 達也(会員)

1. はじめに

本稿は、「鵜沼を語る会」による「相模国準四国八十八ヶ所調査¹」（以下、「語る会 八十八ヶ所調査」）を使って相模国八十八ヶ所を巡る人のために、その情報内容をアップデートすることを目的としています。

私は本年8月に鵜沼を語る会のメンバーとなり、また「相模国準四国八十八ヶ所」を築いた「浅場太郎右衛門の末裔」と致しましても、多くの方が（無駄足無く）効率的に「相模国八十八ヶ所」を廻れるような基礎情報を随時確認・提供しておくことが必要であると考えています。

下に記すように、「語る会 八十八ヶ所調査」はとても充実した内容を有しており、今日もなお相模国の八十八ヶ所を訪れる際のガイドブックとして最適なものといえます。ただ、その調査時点（2009年秋頃）から約15年を経た現在においては、実態面で幾つかの変化が生じており、その記述の一部を修正する方が、八十八ヶ所を巡る人にとってより使いやすいであろうケースも出てきました。（例えば、何らかの事情により弘法大師像の存置場所が他所に移されたようなケースがこれに当たります。長距離を歩いた後で目的の大師像が遠い別所に移設されていることが判明したりすると、疲労も倍加するでしょう。）

本来であれば、「語る会 八十八ヶ所調査」全体についてアップデートがなされるのが筋なのかもしれませんが、そのためには多くの労力・時間が必要となる可能性があります。そこで、ここでは、相模国八十八ヶ所をより効率的に巡るという観点から、比較的に大きいと思われる近時の幾つかの変化について記しておきたいと思います。

2. 「相模国準四国八十八ヶ所」を巡るための資料

「相模国準四国八十八ヶ所」を巡るに当たっては、実際に各寺院・大師堂等

¹ 鵜沼を語る会「相模国準四国八十八ヶ所調査 第1番札所 感応院～第88番札所 普門寺」鵜沼第100号(2010年)47頁～134頁を参照。「鵜沼を語る会」ホームページに掲載されている資料(2024年6月時点)と同じものです。

を歩いてみた方々による資料を参照することが重要でしょう。今世紀に入り、
そうして廻った経験を踏まえて作られた資料に、以下のものがあります²。

○^{といた}樋田豊宏 『相模国準四国八十八ヶ所』(2004 年)(以下、[樋田 2004])

○橋本周也 『相模国準四国八十八ヶ所を巡る』(藤沢市教育委員会、2007
年)(以下、[橋本 2007])

○「語る会 八十八ヶ所調査」鶴沼第 100 号(2010 年)

○アクティブシニア 庭よしのつぶやき 『ブログ 相模国準四国八十八ヶ所
を巡る心の旅(1)～(9・完)』(2018 年 10 月～2019 年 6 月)(以下、
[ブログ 2018])

このうち、[樋田 2004]は藤沢市文書館及び辻堂市民図書館に、そして[橋
本 2007]は藤沢総合市民図書館に、それぞれ所蔵されていますが、資料の利用
という観点からみるとそのアクセスは極めて限定されており、多くの人の目に
触れる機会自体少ないように思います。また、[ブログ 2018]は、最も新しい
資料であるとともに、多くの写真が付されている等の点で極めて興味深い資
料ですが、ブログという媒体の性質上、ガイドブックとして使用するには不向
きと言えます。

従って、現時点でも相模国八十八ヶ所を巡るためのガイドブックとしては、
大師像所在地の地図と大師像の写真も含む資料である「語る会 八十八ヶ所調
査」が最適であるといえるでしょう。

以下では、この「語る会 八十八ヶ所調査」について、アップデート・補足
という観点から、幾つかの点を確認してみましょう。

3. 現時点でアップデート・補足を要する内容

(1) 第 5 番 ^{はら}原大師(地蔵)堂 (「語る会 八十八ヶ所調査」69 頁)

【原大師(地蔵)堂が無くなり、第5番の弘法大師像が普門寺に移されました】

² 2000 年以前にも、次のように、相模国準四国八十八ヶ所に関する優れた資料は存在しますが、や
や情報内容が古くなっていることもあり、巡拝のための資料としては参照していません。

○三木洋『相模国準四国八十八箇所一弘法大師像をめぐる一』(1983 年)

○川島弘之「相模国新四国八十八ヶ所めぐり」(湘南よみうり、1983 年 6 月～1987 年 3 月)

原大師（地蔵）堂のお堂が撤去され、そこに存置されていた弘法大師像が普門寺に移されたことは大きな変化と言えるでしょう。「語る会 八十八ヶ所調査」69 頁に記された住所である「本鶴沼 2 - 19 - 11」付近に行き、地蔵堂が見当らないので右往左往していると、近所に住んでいると思われるご高齢の方が近づいてきました。

「この付近に原の地蔵堂と呼ばれるお堂があると聞きました。辺りを探してみましたけれども、見当たらないようですが…」と尋ねると、「無い、無い、普門寺に移った」というのが、その方の答えでした。

近くの柵の付近を見ると、確かに「原地蔵堂は普門寺に移転しました」との表示がなされています（写真 1）。

地蔵堂自体が撤去され、現在その場所は更地になっている、ということでした。

その後、普門寺の大師堂（写真 2）を訪れると、元々の第 47 番の弘法大師像の右横に、原の地蔵堂から移された第 5 番の像が置かれていました（写真 3）。



写真 1



写真 2



写真 3

(2) 第 26 番 引地山^{ようめい}養命寺 （「語る会 八十八ヶ所調査」80 頁）

【弘法大師像が、同じ境内の別所に移動しました】

「語る会 八十八ヶ所調査」の 80 頁上部には、「大師像は階段を上った左手の石像列に露座」とありますが、当該石像列が全く見当らず、裏の墓地全

体を何度か往復しました。偶々そこをご住職さんが通りかかったので尋ねると、「本堂裏の墓地の区画整理を行った際に、入口付近（本堂の前）に移した」とのことでした。入口付近から向かって左側方向を探すと、確かに頭部がない弘法大師像が「露座」という形で安置されていました（写真4）。



写真 4

(3) 第 60 番 日照山金剛院(廃寺)（「語る会 八十八ヶ所調査」65 頁）

【鼻黒稲荷大明神は、藤沢橋近辺に二つあるので要注意です】

これは実態面の変更ではありませんが、先の2.で紹介した〔ブログ 2018〕に、「大師堂が見つからなかった」旨の記述が見られましたので、念のためここで確認しておきましょう。「語る会 八十八ヶ所調査」65 頁を見ると、第 60 番の弘法大師像は「鼻黒稲荷大明神の裏側にある朱塗りの小堂に安置」とあります。ここでの鼻黒稲荷の住所は、「藤沢市藤沢 30」です。

その一方で、〔ブログ 2018〕は、「県道 30 号線に戻り藤沢橋を渡った少し先の鼻黒稲荷大明神を訪れたが、大師像が安置されているという小堂は残念ながら分からなかった³」としています。どうしてこのようなことが起こったのでしょうか。ブログの当該箇所をよく読むと、大師像が見つからなかった鼻黒稲荷大明神の場所は、第 58 番 金砂山観音堂と同じ場所を指していることが分かります。（ブログには、「第 58 番金砂山観音堂…は、鼻黒稲荷大明神と同じところにあり、参道の両側の石柱に、右には金砂観世音、左には鼻黒稲荷大明神と刻字されていた」と記されています）。ここでの鼻黒稲荷の住所は、「藤沢市藤沢 693」です。

すなわち、藤沢橋付近には次のように鼻黒稲荷大明神が二つあるということが分かります。

- | | | |
|----------|--------------|---------|
| ①鼻黒稲荷大明神 | 住所：藤沢市藤沢 30 | 弘法大師像あり |
| ②鼻黒稲荷大明神 | 住所：藤沢市藤沢 693 | 弘法大師像なし |

³ アクティブシニア 庭よしのつぶやき『ブログ 相模国準四国八十八ヶ所を巡る心の旅(1)(2018 年 10 月 25 日分)』を参照。

あくまで推測の域を出ませんが、
[ブログ 2018] で訪れた先は、②の
鼻黒稲荷大明神（藤沢市藤沢 693）であ
り、「小堂は残念ながら分からなかった」
のも、もともと弘法大師像が存置
されていなかったからということかも
しれません。

実際に①の鼻黒稲荷大明神（藤沢市
藤沢 30）を訪れてみますと、社の右側
に大師堂があり（写真 5）、弘法大師
像は「朱塗りの小堂に安置」されてい
ることが確認できました（写真 6）。
因みに、「鼻黒稲荷」の「鼻黒」^{はなぐろ}とは
かなり奇異な響きをもつ言葉です。こ
の言葉の語源についての定説は見当り
ありませんでしたが、江戸期の藤沢宿の遊
郭周辺で用いられた言葉で梅毒末期に
鼻が欠けたりする症状になることに由来



写真 5



写真 6

するという説もあるようです。また鼻黒稲荷が狭い地域に二つ存在すること
については、石渡一良氏の論稿⁴に、藤沢市藤沢 30 の鼻黒稲荷（弘法大師像ありの
方です）は「正月屋」という商家の邸神（やしらかみ）を祀っており、藤沢市
藤沢 693 の鼻黒稲荷（弘法大師像なしの方です）は「青柳楼」という商家の邸神
を祀っているらしいとの旨の記述があります。名は同じでも、出自が異なる
ということなのかもしれません。

（4）第 56 番 堀川大師（地蔵）堂 （「語る会 八十八ヶ所調査」71 頁）

【堀川大師堂が、一つの区画として独立しました】

「語る会 八十八ヶ所調査」71 頁には弘法大師像が「浅場方。個人宅内にあり、
拝観には許可が必要」とありますが、その後、裏の大師堂を一つの区画として

⁴ 石渡一良「蔵前のお大師さま」わが住む里第 53 号(2004 年)4 頁を参照。これに関連して、有田裕一「藤沢橋周辺の札所、大師像の動向」鵜沼第 105 号(2012 年)10 頁以降も参照。

独立させたようです。（従って、個人宅で許可を得なくとも、大師堂に参拝することが可能になったようです。経路としても、個人宅の北側の細い公道を進み左側に入ることでお堂に到達します）。

(5) 第 24 番 千手院 （「語る会 八十八ヶ所調査」89 頁）

【建替えを終了し、大師像は新しい小堂に存置されました】

2009 年時点で千手院は建替えをしていたようですが、その建替えが 2010 年に終了し、新たな小堂が作られて弘法大師像はそこに存置されていました（墓地の入口付近）（写真 7）。（古い小堂については、「一見犬小屋を連想する現代的（？）デザインの小堂」（「語る会 八十八ヶ所」89 頁）との記述がありましたが、それとは別に新しい小堂が作られたようです）。



写真 7

(6) 第 28 番 圓藏^{えんぞう} 大日堂 （「語る会 八十八ヶ所調査」101 頁）

【真光寺跡地から大師堂が撤去されましたが弘法大師像だけは残っています】

「語る会 八十八ヶ所調査」の 101 頁に記された住所（茅ヶ崎市円蔵 2 - 8 - 10）まで行ってみたものの、見えるのは更地ばかりで、それらしき建物（「小さな大師堂」）は見当らず呆然としていました。すると、隣地の女性が通りかかり、「新たにお寺（真光寺？）を建設するため、以前あったいろいろなものは、近くの輪光寺に移したようですよ」とのことでした。そこで 101 頁の弘法大師像の写真を見せて、「この像も移されたの

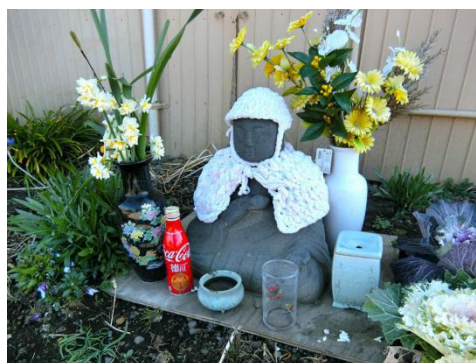


写真 8

でしょうか」と質問すると、「それだけはここに残っていると思う」と言い、更

地の端まで連れて行ってくれました。

そこには、101 頁の弘法大師像と思われる像が、露座で安置されていました（写真 8）。

(7) 第 64 番 おおぞう 大蔵阿彌陀堂（廃堂）（「語る会 八十八ヶ所調査」112 頁）

【大蔵共同墓地の場所を探し当てるのは、容易ではありませんでした】

いつものように、地図アプリに目的地の住所（ここでは、「語る会 八十八ヶ所」112 頁に記された「寒川町 おおぞう 大蔵854」）を入力しましたが、場所が明確に表示されません。そこで已む無く、112 頁の「大蔵」付近の地図を頼りに「大蔵共同墓地」を探しました。しかし、かなりの時間うろうろと歩き回りましたが、なかなか見つかりません。「大蔵地域集会所」の近くを通った際に、そこにおられた消防団の方（後に「寒川町消防団第9分団」の方と分かりました）に尋ねてみました。その方の答えは、「（地図上で弘法大師像のある）通りはあの辺りだが（と指で示す）、あの付近に墓地があったかなあ」というものでした。

お忙しそうだったので、「ありがとうございます。とにかく辺りを探してみます」と言って別れ、指示された付近を更に歩き回りましたが、やはり探し当てることが出来ません。疲れ切って公園のベンチに坐っていると、先ほどの消防団の方が車で通りかかり、当方を手招きしています。わざわざ消防団の地図を調べてくれたというお話でした。

「この112頁の地図だと大蔵地域集会所の少し北に大師像があるように見えるが、（別の）地元地図を見ると大蔵地域集会所から南に100mぐらい行ったところに墓地の記号があり、最も近い共同墓地なら、それしかないだろう」とのことでした。そこで大蔵地域集会所から南の方向に進んでいきますと、確かに右側に共同墓地が見えてきました。一時間以上「大蔵」付近を歩き回って、ようやく大蔵共同墓地にたどり着いたこととなります⁵。

墓地や山林については、地図アプリに当該住所を入力しても、場所がうまく表示されないことが稀に生じます。今回の「大蔵共同墓地」のように住所入力がうまくいかない場合には、共同墓地の真向かいに「株式会社菊地土建（寒川

⁵ 上の2. でご紹介した[橋本 2007]の29頁右側の地図においても、「大蔵共同墓地」の場所は正確に記載されていません。興味深い事象と言えるでしょう。

町大蔵 864)」という会社があるので、この会社住所を入力して探すのも一つの方策でしょう。

(8) 第 30 番 蟠流山^{そうけんいん}宗賢院 (「語る会 八十八ヶ所調査」125 頁)

【竜骨院の階段下にあった大師像は
本堂の前（地蔵群の右側）に移転
しています】

第 30 番の弘法大師像は、もともと境内の竜骨院の階段下に、二つの地蔵像に挟まれる形で安置されていましたが、今は本堂前の地蔵群の右に移されています（写真 9）。



写真 9

4. おわりに

以上、近時の実態面の変化を、8 点挙げました。

今回巡ってみて感じたことの一つは、「相模国準四国八十八ヶ所」が、「弘法大師信仰」を主たる土台としているということです。（これは、「真言宗」「如来・菩薩」信仰にある程度軸足が残っている本場の「四国八十八ヶ所」とは若干ニュアンスを異にしている点かと思われます。）

そして、その「弘法大師信仰」を具現化しているのが、「弘法大師像」参拝であるといえるでしょう。ではそうした「弘法大師像」は何時頃作られたのでしょうか。上の 2. でご紹介した [樋田 2004]⁶によると、「弘法大師像」の台石に刻まれた年月は、文政 3 年（1820 年）のものが合計 21 体、文政 4 年（1821 年）のものが合計 7 体となっており、「弘法大師像」の多くが 1820～1821 年頃に集中して作られたことを示しています。これを踏まえると、「弘法大師像」参拝は、文政 4 年（1821 年）頃に始まった可能性が高いでしょう。

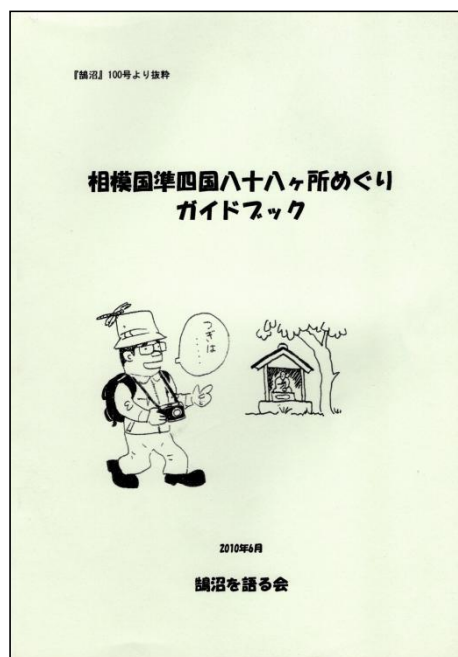
本年（2024 年）は、「相模国準四国八十八ヶ所」の「弘法大師像」参拝が始まってから、約 200 年と少しが経過した年ということになります。この 200 年は、（わざわざお断りするまでもなく、）日本にとっての幕末・近代化の時期そのものであり、激動の時代でありました。宗教的にも、明治期の廃仏毀釈により、

⁶ ^{といた} 樋田豊宏 『相模国準四国八十八ヶ所』(2004 年) 11 頁を参照。

仏教・寺院は大きな打撃を受けましたし、また太平洋戦争後も長らく、（真言宗を含む）密教の評価が不当に貶められる時期が続きました。200 年の間の様々な荒波を乗り越えて、「弘法大師像」の多くがなおこの相模の地に残っていることは素晴らしいことなのかもしれない、という素朴な感想が、心の中に湧いてきます。

そうした一種の「歴史意識」を呼び起こす契機となり得ること——これも「相模国準四国八十八ヶ所」を巡拝することの意義の一つなのかもしれません。

（あさば たつや）



『相模国準四国八十八ヶ所めぐり ガイドブック』

鵜沼を語る会発行 2010 年 6 月



草土社の若手画家(第 0213 話)

渡部 瞭

草土社とは

白馬会の《葵橋洋画研究所》で外光派表現を学んだ岸田劉生と木村莊八は、文芸雑誌『白樺』で紹介されたゴッホやセザンヌなど新印象主義の画風に強く感銘し、1912(大正元)年に斎藤与里・高村光太郎・萬鉄五郎など同志とともに結成したヒュウザン会(後にフユザン会と改名)においてその影響を色濃く反映した作品を発表する。翌年の2回展をもって同会は解散するが、劉生と木村は異画会展洋画部に審査員として参加。この展覧会に出品した清宮 彬・椿 貞雄・中川一政・横堀角次郎・中島正貴・高橋三千夫、そして豊橋出身の高須光治が草土社のメンバーとなった。1915(大正4)年、劉生らは飛田角一郎・柳沢菊次郎を加え、現代の美術社主催第1回美術展覧会を開催。これが実質上の草土社第1回展となり、以後、田村憲・河野通勢らが同志に加わる。草土社の名は当時、劉生が代々木界隈の赤土と草を好んで写生したことに由来する。このころ劉生はデューラーやファン・アイクなど北方ルネサンスに傾倒し、自ら「写実的神秘派」と称して写実を極めていた。他の同人もこれに追随し、時代に逆行するとの批判を浴びながらも、いわゆる草土社風とよばれる特質を生み出す。岸田劉生が転地療養のため鶺鴒に転居すると、劉生を慕って草土社の若手画家の何人かは鶺鴒の貸別荘を借りたり、劉生宅に寄食して世話を焼いたりして親交を深めた。

椿 貞雄

つばき さだお 洋画家 (1896(明治29)年2月10日-1957(昭和32)年12月29日) 出身地 山形県

【学歴】正則中学中退

【プロフィール】

草土社、春陽会会員、大調和展を経て国画会会員。岸田劉生門下。1896年椿

英夫、たけの三男として米沢市上花沢仲町に生まれる。長兄信男は「白樺」を愛読し水彩画を描く青年であったが夭折した。貞雄が画家を志すに至ったのはこの兄の感化による。1914年上京、正則中学に席を置く。同級に横堀角次郎がいた。同年10月、田中屋画廊で劉生の個展を見て感動、翌年弟子入りする。劉生の最も忠実な弟子として常に劉生とともにあった。特に鶴沼時代は師と至近に家を借り、毎日のように往来した。1932年渡欧、フランス、オランダ、スペインを旅する。パリ・ギャラリーカルミースで個展を開く。

【鶴沼とのゆかり】

鶴沼松が岡2-6林別荘(八軒別荘)8号に居住(1920.2.1-1923.1初)。

1917年、劉生が鶴沼に転居すると、しばしば訪ねて来るうち鎌倉の長与善郎夫人の妹を見初め鶴沼に住むようになる。師と恋人の近くに住みたかったのであろう。恋は実り鶴沼で結婚する。「鶴沼海岸小景図」「鶴沼の或る道」(1)(2)(3)(4)「片瀬川」など鶴沼を題材とした作品も多い。

横堀 角次郎

よこほり かくじろう 洋画家 (1897(明治30)年2月17日-1978(昭和53)年)
出身地 群馬県

【学歴】正則中学

【プロフィール】

草土社創立同人 春陽会会員 岸田劉生門下 群馬県勢多郡大胡町に生まれる。前橋中学3年の時、東京の正則中学に転校した。盟友、椿貞雄とは同級生である。油絵を描いていた椿の手引きで油絵を始め、劉生を知る。草土社展に出品のあと、第1、2回春陽展で連続して春陽賞を受賞。第3回には無鑑査となった。ユーモラスな人柄で角さん角さんと人々に慕われた。

【鶴沼とのゆかり】

鶴沼松が岡3丁目植文の貸家から鶴沼海岸2丁目中屋の貸し別荘に居住(1921-1922.6)、のち中屋の2階に間借り(1922.6-1923.9)する。

劉生鶴沼時代に鶴沼に住み常に往来する。1923.9.1の大震災のとき、目を怪我した劉生の妹照子を負って劉生一家の避難を助けた。春陽展に「鶴沼小景」を出品している。『アトリエ』《劉生追悼記念号》昭和5年2月アトリエ社刊に「鶴沼時代の思い出」という一文を書いている。劉生に倣って絵日記を付けていたとあるから、もし横堀日記が現存するならさらに詳しい鶴沼時代の様子が分ろうというものである。

中川 一政

なかがわ かずまさ 洋画家 書家 歌人 1893(明治 26)年 2 月 14 日
-1991(平成 3)年 2 月) 出身地 東京都 墓所:雑司ヶ谷霊園

【学歴】 錦城中学校

【栄誉】 1961 年歌会始召人 1975 年文化勲章

【著書】 詩集『見なれざる人』 『モンマルトルの空の月』

【プロフィール】

1893 年東京本郷西片町に生まれる。父中川政朝、母すわ。1914 年 21 歳の時初めて油絵「酒蔵」を描く。1915 年草土社結成、同人となる。10 月第 1 回、翌年 4 月第 2 回展、入場料は取らず目録を売ったが入場者僅少。浄土宗の「帰命無量壽如来」をもじって中川は「入場無料入場無い」という草土宗のお経を作った。1922 年春陽会設立客員となる。1923 年関東大震災により草土社は事実上解散、伊藤暢子と結婚。1939 年中国に旅行。1949 年神奈川県足柄下郡真鶴町にアトリエを持つ。1953 年北米、南米、ヨーロッパの諸都市を巡遊。1958 年訪中団団長として中国を訪問。

1962 年ミュンヘンのバイエルン独日協会の招きで渡欧。1963 年 1964 年中国、1965 年訪ソの後、英仏伊など 9 ヶ国を巡遊。1975 年訪中、11 月文化勲章受賞。1982 年米国ニューヨーク、ワシントン、ボストン、フィラデルフィアの美術館見学。6 度目の訪中。1989 年 3 月真鶴町立中川一政美術館開館。生涯に油彩、水墨岩彩、書、篆刻などの発表多数。

【鶴沼とのゆかり】

鶴沼の劉生宅（佐藤別荘、松本別荘の両方）を何度となく訪れ、1917 年、鶴沼の風景を描いた作品がある。

岡崎 精郎

おかざき せいろ 洋画家 農民解放運動家 (1898(明治 31)年 12 月 21 日
-1938(昭和 13)年 1 月 4 日)出身地 高知県

【学歴】 高知県立第一中学

【栄誉】 種間寺に「岡崎精郎先生之碑」が高知県農民により建立される

【プロフィール】

幼少より図画に秀で画家を志し 19 歳上京草土社展の岸田劉生の作品に感銘。1918 年、郷土の先輩水彩画家の寺田季一をたより上京、裕伊之助に師事する。5 月鶴沼の劉生宅を訪問、劉生の書生として 7 ヶ月余り住み込み指導を受ける。

この間劉生は《岡崎精郎之顔》をデッサンしている。草土社同人となるも病を得て帰郷、聖書を読み宗教活動中に部落差別を知り解放運動に専心する。秋川村村長、高知県会議員をつとめる。1935 年頃から農民を主題とした絵を描き始める。

【鶴沼とのゆかり】

鶴沼松が岡 4-7-10(1918.6-1919.2)劉生宅に寄食。その後も上京の都度、劉生宅を訪問する。滞鶴中「鶴沼風景」「湘南風景」「轍のある坂道」他を描いた。笠間日動美術館蔵の「麗子の像」には「麗子嬢之像、於相州鶴沼 岸田劉生先(生)画描 一九一八年秋 師岸田劉生先生ヨリ之ヲ賜ル 岡崎精郎識」の裏書がある。

棟方 寅雄（編者註 P7）

むなかた とらお 洋画家（1902(明治 35)年 3 月 27 日-1992(平成 4)年 8 月 11 日）出身地 青森県

【学歴】弘前中学校→東京聖学院神学校

【栄誉】青森県文化賞 青森県褒賞

【著書】『劉生と私』

【プロフィール】

中卒後上京、大阪住友銀行、新聞記者などの職に就く。1921 年、劉生に師事。その後、東京聖学院神学校に学び、1927 年、再度絵の勉強を志し林重義、中川一政に師事。1929 年東京城西学園中学教諭。春陽、二科、日展、中央美術、国際美術の各展に入選。1955 年、二科分裂にともない一陽会創立に参加、同会審査員。

著書『劉生と私』緑の笛豆本の会(1966)刊は鶴沼の劉生宅に書生として住みこんだ当時の様子を回想して書いたもので劉生の家の間取りや劉生の生活が書かれていて興味深い。

【鶴沼とのゆかり】

鶴沼松が岡 4-7-10 にあった貸し別荘、松本陽松園の岸田劉生宅に書生として寄食(1921 年 3 月から 5 月まで、1921 年 12 月から 1922 年 3 月まで)した。

丸山 行雄

まるやま ゆきお 洋画家・尋常高等鶴沼小学校教員（生没年月日不詳）出身地 長野県

【学歴】不詳。師範学校以上の学歴を有していたと思われる。

【プロフィール】

《村娘之図》（1919 年）が出品された第 7 回草土社展を観て感動し、それをきっかけとして劉生に師事することになったといわれる。草土社解散後、「春陽会」創立とともに春陽会へ移り、のちに哲水と号する陶芸家に転じたという。

【鶴沼とのゆかり】

1919(大正 8)年暮れの雨の日に劉生宅を訪れて書生を志願したらしい。

1 月 22 日に信州の国許から電報が来て翌日帰省する。劉生は 2 月 20 日に医者(恐らく高松貞夫)に診断を受けたついでに丸山から託されていた履歴書を持参し、丸山の当地教員就職の斡旋を依頼する。翌日夜に尋常高等鶴沼小学校第 2 代校長=齊藤三郎が来訪し、とんとん拍子に丸山の就職が決まった。

丸山がいつ鶴沼に戻り、小学校に着任したかは、劉生の日記から読み取れない。劉生夫妻は 4 月上旬に京都・奈良に旅行していたので、その間のことと思われる。鶴沼小学校校長は、4 月 1 日付で第 3 代土方義道に替わった。

『村娘像』のモデルだった葉山(川戸) 松さんは鶴沼小学校尋常科に通学していたが、「丸山先生がもう時間がくると、「葉山、帰れよ」って、毎日その時間がくると先生がね。帰れっていわれれば、ハイって帰ってってすぐ岸田さんへそのモデルになって。」と、85 歳の時に思い出を語っている。

小学校の教員になったことによって、書生として劉生宅での寄食をやめ、恐らく植文の二階に間借りした。後に横堀角次郎も暫く同居する。

後に福田医師の養女の家庭教師となり、福田家の二階に住んだが、1923(大正 12)年 4 月に結婚して東京に住むことになり、学校を退職し鶴沼を去った。

劉生の死去に際し、追悼文を寄せている。

草土社 鶴沼関係年表

西暦	和暦	月	日	記事
1915	大正 4			現代の美術社主催第 1 回美術展覧会を開催。これが実質上の《草土社》第 1 回展
1917	大正 6	2	22	画家=岸田劉生、鶴沼の佐藤別荘に移住
1917	大正 6	4~5		画家=中川一政(1893-1991)、佐藤別荘の岸田劉生宅に 1 か月ほど滞在
1917	大正 6	6	24	画家=岸田劉生、松本別荘(鶴沼下岡 6732-13・現鶴沼松が岡 4-7-10)へ移る

1918	大正 7 6	画家=岡崎精郎(1898-1938)、岸田劉生宅に寄食
1919	大正 8 2	岡崎精郎、岸田劉生宅を離れる
1919	大正 8 12	丸山行雄、岸田劉生宅に書生として寄食
1920	大正 9 2 24	中川一政、鵜沼の岸田劉生を訪ねる
1920	大正 9 2 1	画家=椿 貞雄(1896-1957)、鵜沼八軒別荘に居住。岸田劉生と親交を結ぶ
1920	大正 9 4	丸山行雄、劉生の斡旋で尋常高等鵜沼小学校に就職
1920	大正 9	椿 貞雄、「鵜沼の或る道」(油彩・カンヴァス 38.0×45.6cm 宮城県美術館蔵)を制作
1921	大正 10 3~5	画家=棟方寅雄(1902-1992)、岸田劉生宅に寄食
1921	大正 10 4 5	裕 伊之助、岸田劉生を訪問する
1921	大正 10 9	画家=横堀角次郎(1897-1978)、品川区上大崎より鵜沼海岸2丁目中屋の貸し別荘に転居
1921	大正 10	椿 貞雄、「鵜沼風景」(油彩・カンヴァス 45.5×53.0cm 平塚市美術館蔵)を制作
1921	大正 10 12~ 大正 11 3	画家=棟方寅雄、岸田劉生宅に寄食
1922	大正 11 6	横堀角次郎、中屋の貸し別荘から出て中屋の2階に間借り
1922	大正 11 1	《春陽会》結成。木村莊八、岸田劉生、椿貞雄、中川一政、萬鉄五郎らを客員として迎える
1922	大正 11	椿 貞雄、「鵜沼風景」(油彩・カンヴァス 53.0×45.5cm 星野画廊蔵)を制作
1922	大正 11	横堀角次郎、「鵜沼風景」(油彩・カンヴァス 32.0×42.0cm 東京都現代美術館蔵)を制作
1923	大正 12 1 初	椿 貞雄、八軒別荘を去る
1923	大正 12 4	丸山行雄、結婚して東京に転居
1923	大正 12 9 1	関東大震災により岸田劉生宅、倒壊。津波を恐れ、石上まで逃避。鈴木米店に避難する
1923	大正 12 9 16	岸田劉生、鵜沼を去り名古屋へ出発。《草土社》事実上解散
1923	大正 12 9	横堀角次郎、被災して鵜沼を去る

<故 渡部瞭会員「鵜沼を巡る千一話」第 0213 話より>

追加資料 ■草土社に関する調査■

【出展：大正期美術展覧会出品目録 東京文化研究所編】

草土社展覧会	会場	開催期間
第1回展	東京・読売新聞社	T 4 (1915)/10/17～31
(現代美術社主催美術展覧会と称し2回目から「草土社展覧会」と呼ぶことにした)		
第2回展	東京・銀座玉木美術店	T 5 (1916)/4/1～10
第3回展	東京・赤坂溜池三会堂	T 5 (1916)/11/11～17
	名古屋・愛知県商品陳列館	T 6 (1917)/2/10～20
第4回展	東京・京橋玉木商会	T 6 (1917)/4/20～26
第5回展	東京・赤坂溜池三会堂	T 6 (1917)/12/15～24
第6回展	東京・赤坂溜池三会堂	T 7 (1918)/12/14～23
第7回展	東京・赤坂溜池三会堂	T 8 (1919)/12/8～17
第8回展	東京・赤坂溜池三会堂	T 9 (1920)/12/15～24
	名古屋・栄町十一屋呉服店	T 10 (1921)/1/26～30
第9回展	東京・赤坂溜池三会堂	T 11 (1922)/11/4～13

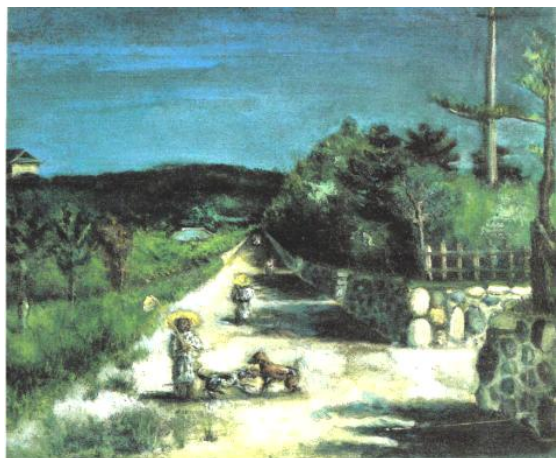
「草土社の若手画家」に登場する人物の草土社展出品作品数

(8回展名古屋は目録未発見)

	1回	2回	3回	名古屋	4回	5回	6回	7回	8回	9回
中川 一政	4	2	10	—	12	8	6	—	11	8
椿 貞雄	18	8	37	5	17	24	14	13	17	12
横堀 角次郎	16	15	11	3	5	15	6	14	7	14
岡崎 精郎							7	14		
丸山 行雄	-----							5	-	
棟方 寅雄	-----									

(編者註)

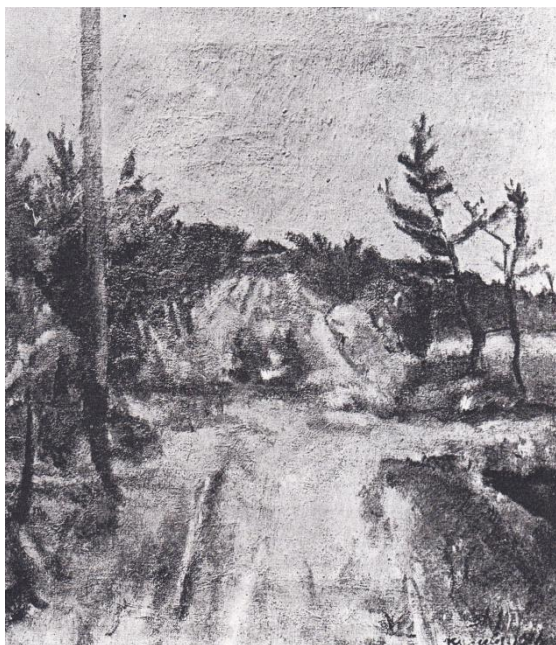
鵜沼を巡る千一話「草土社の若手画家」では、**棟方寅雄**を草土社のメンバーとしているが、上記のように棟方寅雄は草土社展に出品していないし、草土社でも棟方を会員とはしていない。彼は画家を志して岸田劉生宅の書生に入ったが、詩作に転じ一時絵画を離れた。岸田劉生歿後、再び絵筆をとり1928年の第6回春陽会展に「八重椿」が入選、画壇復帰した。



椿貞雄 「鵠沼の或る道」



横堀角次郎 「鵠沼小景」



中川一政 「鵠沼風景」



岡崎晴郎 「湘南風景」

「鵜沼を語る会」活動の記録

(令和5年12月～令和6年11月)

令和5年

12月例会

12月12日(火) 10時～12時 文化活動室 14名出席

会誌『鵜沼』123号配付 130部作成 贈呈49部

- ・カラーページコピー取り：12/4 ・印刷：12/7 ・製本：12/9
- ・新年会2024 出席者最終確認
- ・11月例会に引き続き2回目の「鵜沼地区の通称地名」について話し合った

朗読：「江ノ電、踏切のある風景」(佐江衆一著) 朗読 刀根恵子会員

12月運営委員会

12月19日(火) 10時～12時 第1談話室 6名出席

- ・新年会ー2024年1月9日(火) さかな家 12名 会費¥3,500を最終確認
- 1/8景品買い出し(大川/田中/吉永) ・ビンゴ道具確認(田中会員→内藤会員)

令和6年

1月例会・新年会

1月9日(火) 11時30分～13時30分 12名出席

例会日を新年会に充て、藤沢・「さかな家」で開催。今回もビンゴゲームを楽しんだ。会費：¥3,500 幹事：田中会員 商品購入：大川/田中/吉永会員

1月運営委員会

1月30日(火) 10時～12時 第1談話室 4名出席

- ・スクリーンを借り、12年前の「藤沢の巨樹めぐり」を映写

2月例会

2月13日(火) 10時～12時 学習室① 16名出席

- ・明年度の活動について話し合った ・3回目の「鵜沼地区の通称地名」について話し合った(この回で終了)

2月運営委員会

2月27日(火) 10時～12時 第1談話室 6名出席

- ・春の歴史散歩は『俣野別邸訪問』に決定。4月例会日を充てる(4/9) 15名が参加希望
- ・3月例会で「藤沢の巨樹めぐり」を映写することにした

3月例会

3月12日(火) 10時～12時 第3談話室 10名出席

・歴史散歩：4月例会時を『俣野別邸訪問』に充てる

お話：「藤沢の巨樹めぐり」を映写。多くの会員は巨樹めぐりのイベントを知らない。実施後10年以上経っているので無くなった巨樹もある

3月運営委員会

3月26日(火) 10時～12時 第1談話室 6名出席

4月例会

4月10日(水) 『俣野別邸訪問』4/9(火) が雨天のため翌4/10(水) に延期
快晴、9名参加(翌日に延ばしたため6名が欠席) 遅く咲いた桜が見事だった

4月運営委員会

4月30日(火) 10時～12時 第1談話室 6名出席
・収支報告者など総会資料の確認

■第38回定期総会 5月例会

5月14日(火) 10時～12時(総会：～10時30分) 第3談話室 14名出席
総会司会：吉原会員 総会議長：竹内代表 議案書・会則・会員名簿配付

令和5年度収支決算報告

収入：70万3,069円 支出：21万8,933円 次年度繰越金：48万4,136円

令和6年度事業計画

- 公民館まつり出展：特になければ「藤沢の巨樹めぐり」を展示。このイベントは公民館まつりでは未発表
- 史跡めぐり：『俣野別邸訪問』4月10日(水) に9名参加で実施済み
- 会誌第124号制作：12月1日発行予定
- その他：活動を進めてゆくなかで事業計画として相応なものと考えられるテーマが提案された場合、活動内容ならびに経費について検討し順次追加
- 明年度は「鵜沼を語る会」設立50周年。記念行事をどうするか

5月例会 ・年会費(¥3,000)を集める。・今年度の事業計画を話し合う
・伊東大介さんが入会

5月運営委員会

5月28日(火) 10時～12時 第2談話室 4名出席
六本松古戦場保存会を午後、訪ねる(栗田会長は不在)

6月例会

6月11日(火) 10時～12時 学習室① 16名出席

・「六本松古戦場」「松岡静雄先生之碑」についての調査研究の提案

お話： 鶴沼郷土資料展示室『藤沢市・マイアミビーチ市姉妹都市提携 65 周年記念』を見学

6月運営委員会

6月25日(火) 10時～12時 第1談話室 5名出席

・公民館まつり申し込み ・会誌 124 号原稿について(なかなか集まらない)

7月例会

7月9日(火) 10時～12時 学習室① 16名出席

・「六本松古戦場」「松岡静雄先生之碑」について話し合う

朗読：「烏森神社のいっとき祭り」(佐江衆一)を刀根恵子会員が朗読した

7月運営委員会

7月30日(火) 10時～12時 第1談話室 5名出席

8月例会

8月13日(火) 10時～12時 学習室① 10名出席

・公民館まつりと会誌 124 号について ・創立 50 周年の記念行事について

・浅場達也さん(東京在住)が入会

8月運営委員会

8月27日(火) 10時～12時 第1談話室 6名出席

・公民館まつりの役割分担について 会誌 124 号原稿状況 ・明治初期の鶴沼村居住者について ・浅場達也会員が出席

9月例会

9月10日(火) 10時～12時 学習室① 15名出席

・公民館まつり展示材料・役割分担、会誌 124 号原稿の途中経過について報告

朗読：「諏訪神社の大祭と娘の太鼓」(佐江衆一)を刀根恵子会員が朗読

・その後、フリートークとして創立 50 周年記念行事について話し合った

・例会後、県総合教育センター跡地の楷の木について大谷房江さんから現状報告を受けた(渡部/有田/田中/竹内)

9月運営委員会

9月24日(火) 10時～12時 第1談話室 6名出席

- ・会誌 124 号原稿についてアップデート
- ・楷の木保存について

10 月例会

10 月 8 日(火) 10 時～12 時 学習室① 11 名出席

- ・公民館まつりについて一どのような展示をするか展示材料を並べて説明/役割分担最終確認
- ・会誌 124 号原稿進捗状況
- ・総合教育センター跡地の楷の木保存に就いては当会は直接行動できない/鵜沼中学の校舎建て替えによる中庭の楷の木については移植の予定(窪島校長)

お話：フリートーク

■第 48 回鵜沼地区公民館まつり

10 月 19 日(土)-20 日(日)

学習室①で「藤沢の巨樹」を展示。パネル 4 枚に展示趣旨、巨樹の写真、所在地図など 84 枚を使い、ビジュアルな展示とした。題字は刀根会員による揮毫

10 月運営委員会

10 月 29 日(火) 10 時～12 時 第 1 談話室 6 名出席

11 月例会

11 月 12 日(火) 10 時～12 時 第 3 談話室 14 名出席

- ・公民館まつり「藤沢の巨樹」展示報告、出席者からの感想
- ・会誌 124 号進捗状況 印刷：11/29(金) 製本：12/2(月) 130 部制作
- ・新年会 2025 の案内：1 月 14 日(火) 11：30～ 「さかなや」 会費 ¥3,500
現時点での参加希望者を確認。詳しくは 12 月例会で案内。幹事：田中会員
- ・今年度の会計収支途中報告 概ね予算内での活動となっている
- ・永井純一さんが入会

お話：フリートーク 明年の創立 50 周年記念行事などを主として話し合った

11 月運営委員会

11 月 26 日(火) 10 時～12 時 第 2 談話室 7 名出席

- ・会誌 124 号制作最終作業/新年会 2025 の案内確認
- ・公民館駐車場有料化/公民館名称廃止し市民センターに統合説明会について

<会員>42 名 2024 年 12 月 1 日現在

入会：伊東大介(5 月 14 日) 浅場達也(8 月 1 日) 永井純一(11 月 12 日)

退会：井伊正子((8 月 15 日) 物故：神谷祐太(8 月 12 日)

編集後記

■酷暑の夏がなかなか終わりを告げない中、10月19日-20日に鵜沼地区公民館まつりが開催された。「藤沢の巨樹」をテーマに、12年前に巡った巨樹の写真を中心に展示発表した。展示準備をしていると6回にわたって巨樹巡りをした時のいろいろなことが思い出された。開催日には一緒に巡った元会員も展示会場に顔を見せてくれ、場所や目指す巨樹を探すのに苦労したことなどを懐かしく話した。年々、老いた巨樹が姿を消してゆくのは避けられないことだが、改めて自然のすごさを知り、もっと大切にしなければという思いが強くなった。

今号の割付作業をしていると文化勲章受章者のニュースが入って来た。受章者7名のうち2名が鵜沼とゆかりがある。一人はチェロ奏者の堤剛さん、もう一人は環境工学者の中西準子さん。堤さんは鵜沼小学校の同級生、中西さんは鵜沼海岸駅近くに住まわっていて子どもの頃、隣同士ということもあり良く出入りしていた。鵜沼小学校の卒業生二人が栄えある文化勲章を受章したのは喜ばしい。(弥)

■「真白き富士の根」が流行った要因の一つは旋律がヨナ抜き音階で構成されているからである。明治時代、西洋音階ドレミファソラシをヒフミヨイムナで表したが、ヨ（ファ）とナ（シ）を抜いたドレミソラ5音階の曲が好まれた。さらに演歌師たちは街頭でこれを短調にしてヴァイオリンを弾き歌ったから、歌詞の内容と共に、一層悲壮感を増して流行したのである。(岡田)

■今年はいつまでも暑い夏が続いた。124号の記事もなかなか集まらず、ページ数が少ないままの発行になると思いきや、公民館まつりの頃になってご覧の通りのページ数になった。流石、伝統の『鵜沼』である。新しい会員の方の記事も目の付け所が面白く、今後が楽しみだ。また鵜沼に育った私には「オンジョ」という言葉は全国的なものと思っていたが、この辺りの他、福井や島根で聞かれる方言のようだ。それと私達はメスは腹部が茶色なので「チャン」と呼んでいたが、こちらの方はどうだろう。(有田)

■124号では松岡静雄の石碑について書く機会を得た。2～3年前、犬の散歩の途中にこの石碑に気が付き、松岡静雄はどういう人物か興味が湧いた。石碑は松岡との交流を偲ぶ多くの人々の思いが感じられる立派なものである。松岡静雄については次女の野口喜久子氏の「砂のいろ」から知ることができる。この本は松岡と交流のあった人々の思い出を中心に彼の人となりを描いている。その一人に八巻藤吉氏がいる。この名前を見てびっくりした。八巻氏は、私の高校時代、個人的に古文と漢文を習っていた元湘南高校の国語の先生である。松岡静雄と八巻氏、そして私という関係に人の縁の不思議さを感じている。(大川)

『鵜沼』 第 124 号
令和 6 (2024) 年 12 月 1 日発行

本誌の記事引用の際は
ご連絡ください

編集・発行 鵜沼を語る会
藤沢市鵜沼海岸 2-10-34
鵜沼公民館内
電話 0466-33-2002

URL <http://kugenuma.sakura.ne.jp>